

平 和 の 研 究

—高校生の国際理解を深めるために—

I 実験の概要

主題「平和の研究」

——高校生の国際理解を深めるために——

主題と主題設定の理由

ユネスコ憲章は、その前文の冒頭に「人の心の中にとりでを築く」ことを求めている。そして「人間の尊厳に欠くことのできない」ものとして「文化の広い普及と正義，自由，平和のための人類の教育」をあげ、これを果すことは、すべての国民の「神聖な義務」であると説いている。しかし、憲章の次のくだりは、平和に「政府の政治的及び経済的取りきめにのみに基づく平和」と「世界の諸人民の一致した、しかも永続する誠実な支持を確保できる平和」とがあること、そして、真の平和は「人類の知的及び精神的連帯の上にきざかれなければならない」という。

本付属では、生徒たちに、ユネスコ精神の最高価値をあらわす「平和」について考えさせ、また具体的に現実の国際社会の諸問題を調べさせることによって、国際理解教育への有効な道を見出したいと考えて、この主題を設定した。

教育実験の仮設

本年度は、昨年度の継続実験であり、本実験の段階である。昨年は、主題を「東洋と西洋に於ける平和の考え方について——（東洋と西洋の文化価値の相互理解への一つのアプローチとして）」と設定し、各種の予備調査、実験を試みた。本年はその成果を生かし、昨年度の反省の上に、問題の追求に努めたい。

昨年度の実験過程で得られた問題点の最大のポイントの一つは次の点である。即ち、平和の問題をとりあげて追求していく角度としては、東洋と西洋の考え方のちがいというより、むしろ現実的態度と理想的態度のちがいという方向に赴かざるを得なかった。たとえば、中ソ論争にしても、これを東洋と西洋の差という見方だけで果して充分であろうか。そこで主題も敢えて「平和の研究」と改題し、実験仮設は、ユネスコ精神を中心として国際平和を考えさせる学級（実験学級）と現実的態度で国際平和を学習する学級（比較学級）を設け、その両者の間の変容を調べてみることによって、あるべき国際理解教育の有効な道を見出せるのではないかと仮定した。

教育実験 目標

1. 仮設に基づいて、指導計画を昨年よりも充実して比較実験を進め、問題点を明らかにする。
2. とくに最近の国際情勢の変動、科学の進歩については専門家の協力を得て、平和論の理想と現実を明かにする。
3. プリテスト及び指導後の評価を厳密にする。とくに指導による反作用に注意する。
4. この実験を通じて、現行高校教育課程の改善に資することとしたい。

対象と期間

ア. 対象 高校第1学年4学級 (各44名) (男子のみ)

イ. 期間 1月18日ー2月15日

指導計画

日 時	編成		実 験 学 級	比 較 学 級
	時間			
1月18日 (月)	1		プ リ テ ス ト	
1月19日 (火)	1		平和運動の歴史について (明石)	
1月21日 (木)	1		ユネスコ憲章について (大西)	
1月25日 (月)	2		国連と世界平和 (山内大介氏)	
1月26日 (火)	1.5		核時代の科学 (中村洪介氏)	
1月28日 (木)	1.5		欧米の若い世代の平和観について (白木)	
1月18日 (月)	1.5		ユネスコ活動について (彦坂春吉氏)	
1月26日 (火)	1		カントの平和論 (沢登)	レーニンの平和論 (林)
1月27日 (水)	1		仏教と平和 (山本光氏)	体制と平和 (岡本)
	中止		キリスト教と平和 (鈴木氏)	
1月28日 (木)	1			軍縮問題 (渡辺誠毅氏)
	1			南北問題 (生徒発表)
1月29日 (金)	1		ラッセルの平和論 (大西)	最近の国際情勢と平和問題 (坂本義和氏)
2月15日 (月)	1		ポストテスト	

Ⅱ 指 導 の 内 容

指導記録 1

題目「平和思想と平和運動の歴史」

教官 明 石 総 一

指導目標

本題目の授業は、昨年と同様に、実験の総序的な役割を負わされている。昨年度に試みた結果の反省のもとに、かなり内容に修正を加え、テーマも平和運動を加えることになった。それだけに内容が多岐にわたり総花的にならざるを得ないが、中心の目標は、人類がこれまで、「平和」をどう考え、どのように実践してきたかを歴史的にたどり、生徒に一つの展望を与えることにある。

指導内容の概要

○導入として、「平和の研究」の意義にふれ、とくに、本年年頭の代表的新聞の社説などに平和をとりあげているものが多かったこと、R.アロンの論説（日本経済新聞1月1日）などの紹介をこころみる。

○平和理念は、学習の展開のうちに、各自考えてもらうとして、とりあえず、ここでは最小限戦争のない状態と考えて出発する。ある人の計算によると、紀元前1496年以降、3,446年間に、平和な年月は244年しかない。4,000年間に8,000件の戦争があったという。このようなこともあらかじめ考えさせて、「平和の研究」の導入とする。

○別表プリント（「平和思想と平和運動の歴史」）を使って、古代ギリシア、古代中国から始めて、東洋・西洋それぞれの平和への動きをさぐる。

○この間に、「キリスと教と平和」以下諸講師の演題の位置づけをこころみつつ、説明する。

○20世紀以降については、東・西を区別せず世界を一体として扱い、大きな動きをとらえていく。とくに核兵器の出現により「新段階の平和問題」（モーゲンソーの言葉）が真剣に考えられねばならなくなったことに注意を促す。「全体的破滅を避けるという目標は他のあらゆる目標に優位せねばならない」というアインシュタインの言葉を結びとする。

生徒の反応

別表プリントを用意したので、本実験最初の授業としての概観には便利であったらしい。しかし、何分、総花的に扱わざるを得ないので、突込みの足りない憾みはあり、生徒の中にこういう意味の不満がみえた。

後に残された問題点

昨年にも痛感したのだが、東洋、とくに日本における平和思想の流れ、平和運動の歴史について、専門家の研究が乏しい。また、本年は、平和運動の歴史という視点を立ててみたのであるが、これについては、洋の東西を問わず、資料が不足している。とくに大衆運動の歴史に、鳥瞰的によくまとめられたものがすくないのは意外に思う。

資 料

○憲法研究所「平和思想史」法律文化社

○笠信太郎「いかにして20世紀を生きのびるか」文芸春秋新社

- 岩波現代思想 9. 杉捷夫「平和論の出発点」
○雑誌自由1月号「世界平和推進会議」から関連論文

指導記録 2

ユネスコ憲章について

教官 大西光興

指導目標

1. ユネスコの成立と組織、任務について理解させる。
2. ユネスコ憲章の前文をプリントを用いて英文で読ませ、その根本精神を理解させる。
3. ユネスコ憲章全体について概略を理解させる。

指導内容

1. 勝者にも敗者にもひとしく戦争の悲惨を痛感させた第2次世界大戦は、恒久的な世界平和を保証する機関として、「国際連合」を生んだ。これは第1次世界大戦後にできた「国際連盟」の失敗に鑑み、単に政治的取り極めだけに頼らず、人類の知的道義的連帯の上に立って、衣食住の生活条件を改善し、より豊かな文化的生活が楽しめるようにするという基礎的な仕事に大きな重点を置いたところに特色がある。「国際連合」は現在115ヶ国が加盟しており、総会のもとに、安全保証理事会、経済社会理事会、信託統治理事会、国際司法裁判所、事務局の五機関を持つが、1945年10月に国連憲章が発効した直後、ロンドンに44ヶ国の代表が集まり、国連憲章に従い教育、科学、文化の分野を担当する専門機関を設立する為、ユネスコ憲章が起草された。このユネスコ憲章は1946年11月4日に発効し、国連憲章が確認している正義、法の支配、人権の確立及び基本的自由を、教育・科学・文化を通じて達成することにより、世界の平和と安全に貢献をする目的を以って、国際理解の増進、一般の教育、文化の普及、自然科学、社会科学の研究助成と業績の交流、文化活動（思想、芸術等の出版物及び人物）の交流、文化遺産の保護、マスコミ利用の拡充などの任務を遂行している。現在ユネスコに加盟しているのは117ヶ国で、本部はパリにあり、総会、執行委員会、事務局より成る。現事務総長はフランスの哲学者ルネ・マウ氏である。日本は1951年にユネスコに加盟した。

2. ユネスコ憲章の根本精神は「戦争は人の心の中で生まれるものであるから」世界平和を実現するためには「人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という思想に立脚している。人類の歴史をふり返るとき、相互の風習や生活に関する無知が、相手に対する疑惑と不信を生み、ついには戦争にまで拡大した。また人間がひとしく持つ尊厳と権利を否定し、相互に尊敬し合う精神が欠けていた為、相互が傷つけ合ってきた。第1次大戦後、平和維持が話し合わせ、国際連盟の成立を見たが、結局は失敗に終わった。その理由は、単にそれが政府間の政治的経済的取極めに過ぎず、「人類の知的道義的連帯」によって基礎が固められていなかった為であった。ユネスコはこのような失敗をくり返すことを避ける為、先ず前述の根本精神を宣言し、これに基いて「文化の広い普及と正義、自由、平和のための人類の教育は人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つ、すべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である」とし、ユネスコの目的とするものとして、先ず、教育の普及と機会均等の実現、真理の制約なき追求や、思想、知識の自由な交換の保証と発展、相互理解の為にあらゆるマスコミの利用を可能にし、更に普及発展することを挙げている。

3. 第1条, 目的と任務。内容はすでに述べた通りであるが, これらの任務を遂行するに当っては, 内政に干渉しないことを保証している。第2条加盟国の地位。ユネスコに加盟し得るには, 国連加盟国であること, または, 国連加盟国でなくても, ユネスコ執行委員会の勧告に基づき, 総会の3分の2の賛成を得ればよい。第3条, 諸機関。第4条, 総会。各加盟国から5名以内の代表を出し, 2年に1回総会を開く。主な任務は執行委員会委員の選挙, 事務局長の任命, 加盟承認, ユネスコの政策と事業計画の主要方針の決定, 予算の決定, 国際条約及び勧告の採択などである。第5条, 執行委員会。加盟国の代表の中から総会で選挙された30名の委員で構成し, 毎年2回以上会合する。主な任務は, 総会議事日程の準備, 事業計画実施の監督, 事務局長の指名, 総会に代って細部について決定, 事務局長に対する助言等。第6条, 事務局。事務局長は任期が6年で, 執行委員会で指名され総会で任命される。事務局長は, 総会, 執行委員会及び諸委員会に投票権なしで参加する。事務局は事業計画案と予算案を執行委員会に提出し, また, ユネスコの諸活動に関する報告を行う。

第7条, 国内協力団体。政府とユネスコ国内委員会が, 教育科学文化にたずさわる諸団体に, ユネスコ事業に参加させる。

第8条, 加盟国による報告。加盟国はユネスコ総会に教育科学文化活動, 関係法令規則統計, ユネスコが行った勧告及び条約に基づいてとった措置について報告の義務を持つ。

第9条, 予算。加盟国がその経済力に応じた割合で分担金を出す。又寄付金によってもまかなわれる。

第10条, 国際連合との関係。国連憲章第63条に基づき, 経済社会理事会と連携している。

第11条, 他の国際専門機関との関係。執行委員会の承認のもとに, 関係諸団体と協力し得る。

第12条, この機関の法的地位。国連憲章第104条及び105条に準ずる。

第13条, 改正。総会の3分の2の承認が必要。

第14条, 解釈。英文及び仏文を正文とし, 疑義・紛争の解決は国際司法裁判所又は仲裁裁判の決定にゆだねる。

第15条, 効力の発生。20カ国がこの憲章に受諾した時に発効する。そして1946年11月4日にユネスコ憲章 (Constitution of the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization) の誕生を迎えたのであった。

資 料

1. 学校における国際理解教育の手びき 日本ユネスコ国内委員会編
2. ユネスコ憲章及び国連憲章英文版。
3. 国際連合の研究 有斐閣
4. 「クーリエ」, 「東と西」協力学校 circular 等。

指導記録 3

題目「カントの平和論」

教官 沢 登 岩 尾

本授業設定の趣旨

ユネスコ憲章の前文に戦争の原因と平和の要件を述べている。「戦争は人の心の中で生れるものであるから, 人の心の中に平和のとりでを築かなければならぬ」と。この授業が

せめて「平和のとりで」のひとつの石垣でもよいから役立たせてみたいとの念願である。単なるカントの観念論であっても、そこには平和への熱情と、彼なりの方法論の思考の展開がある。その目的実現のために「永遠平和のために」を引用した。

指導内容

永久平和論

解説, ドイツの哲学者であるカント (1724~1804) はフランス革命戦争に影響され1795年「永久平和論」著わし, 永久平和達成のために禁止さるべき予備条項6項目, 積極的に実現することをめざす確定条項項目を示し, 常備軍の撤廃, 国家組織の民主化, 国家連盟等を主張している。

予備条項

- ① 将来, 戦争を起すような材料を秘かに留保してなされた平和条約は, 決して平和条約と見なされてはならない。
- ② 独立して成立している如何なる国家も, 継承, 交換, 買収, あるいは贈与によって, 他の国家の所有とせられてはならない。
- ③ 常備軍は時を追うて全廃さるべきである。
- ④ 国家の対外的紛争に関連して, いかなる国法も起されてはならない。
- ⑤ いかなる国家も暴力をもって他国の体制及び統治に干渉してはならない。
- ⑥ いかなる国家も他国との戦争において, 将来の平和に際し, 相互の信頼を不可能にせざるを得ないような敵対行為は決してなしてはならない。例えば, 暗殺者や毒殺者の使用, 降伏条約の破棄, 又は敵国における暴動の煽動など。

確定条項

- ① 各国家における公民的体制は共和的でなければならない。
- ② 国際法は自由な諸国家の連盟の上に基礎をおくべきである。
- ③ 世界公民法は普遍的なる友好の諸条件に制限されるべきである。

指導の反省

正味50分の授業であり高一の生徒には, 永遠平和のための哲学的草案 (1795.8) の論文における歴史的背景の説明がなければ理解し難いのである。永遠平和のためというこの皮肉な題名は, かのオランダの旅館の主人の, 墓地を描いた看板の上に刻されていたものである。カントが『夢想曲』と呼んだ「永遠平和の為に」はそれ以前, サン・ピエルの著名な「永遠平和の草案」(1712—1716) に示唆を得ていたものである。

生徒は国際連盟→国際連合への思想的基底にこの脈絡をたどり得たことは理解し得たであろう。また, 大思想家としてのカントの偉大さも同じくである。

指導記録 4

バートランド・ラッセルの平和論

教官 大西光興

指導目標

最近のベトナム紛争の激化により東西の緊張の増した現世界情勢の中であって, 英国は通んで東西の調停を計るべく努力している。この英国の動きの背景に, 英国思想界をリードする人物の一人であるバートランド・ラッセル卿の平和思想がうかがわれる。彼は93才という高令にも拘らず, 著作, 放送等を通じて, 世界平和の確立の為に全世界の人々に呼

びかけている。彼の著作は膨大な数に及ぶが、特に最近発表された若干の論文を通じて彼の平和思想の一端を紹介し、原文の抜粋を生徒に読ませて、生徒に平和についてより真剣に考えさせることを目標としている。

指導内容

1. バートランド・ラッセル略伝。

2. 戦争の原因とその解決法。

(1) 経済的利害の対立が国家間の紛争の一つの要因であるが、これは科学技術を発達させ生産能率を向上させること、原子力の平和利用を含む新しい資源の開発を進めること、同時に後進国に於ける生活水準を引き上げるべく、国際的機関が中心となって援助を行うこと、特に後進国に於ける出生率を抑えるために、産児制限を行うことによって解決され得る。

(2) 狂信的愛国心と信仰、人種の偏見も戦争の一要因として見逃すことができない。これを解決するには、超国家的自由主義教育の普及にまたねばならない。

(3) イデオロギーの対立、特に共産主義と資本主義の対立が、現在の東西緊張の主な原因となっている。この緊張は、東西間の相互不信や自尊心によって、核兵器を中心とした軍備競争を現出せしめている。核弾頭をつけたミサイルが、押しボタン一つで相手国を壊滅せしめるにとどまらず、非戦闘国をも破壊し、ついには全人類を滅亡させる危険をはらんでいる。この危機を克服するにはいかにすべきか。ラッセルは次の如く主張する。

(i) 中立国がリードをとって、米ソに平和共同宣言を行わしめる。

(ii) 国連の強化。中共の国連加盟を認める。大国の専横を除き、世界の世論を真に生かすため、拒否権の廃止。

(iii) 偶発戦争の危険を排除する為にミサイル、原子力潜水艦の漸廃。

(iv) 東西間での核兵器の破壊力についての情報交換と、科学者を中心とした核戦争反対運動の推進。

(v) 東西中立の各陣営から同数の代表を出して、調停委員会を設置し、摩擦の軽減、民族自決権の保証という原則を貫いて、あらゆる国際問題の平和的解決を公平に行う。

(vi) 中立勢力を増強させることが、東西の対立による危機を軽減させるものであるから、英国が、北大西洋条約機構(NATO)を脱退して、中立側に立つこと。

以上の対策を絶えざる忍耐力をもって実現し、ついには、軍事力を全廃するか、あるいは一つの国際的機関によって管理を行って、地球上を壊滅の危機から解放し、重要資源(石油、鉄、ウラン、電力、食糧など)の国際管理を行う一方、低開発国の生活水準を西欧並みに引き上げて、経済的不均衡をなくし、教育を刷新、普及して、人類愛に充ち、国際的視野に立って判断し実践し得る人間を造ることにより、必ずや世界は一つとなり、世界政府が樹立される。ここに至って全人類は永久の平和と繁栄を実現するのである。

資料

- (1) バートランド・ラッセル著作集(全14巻)
- (2) ラッセルに於ける平和と教育 柴谷久雄著
- (3) Bertrand Russell, A Sketch of his Life and Work by H. W. Leggett.
- (4) Education and the Good Life, by B. Russell.
- (5) Nightmares of Eminent Persons, by B. Russell.

(6) New Hopes for a Changing World, by B. Russell.

(7) Has man a Future ? by B. Russell.

(8) ラッセルは語る 東宮隆訳

生徒には、(6)、(7)より抜粋した文章をプリントして配り訳読させた。

指導記録 5

題目「レーニンの平和論」

教官 林 幹一郎

指導目標

1. 現在、東西両体制間には、武力によるのではなく経済競争によって勝負を決めようとする「平和共存」という緊張緩和の姿勢がとられている。しかし局地的には武力紛争もあり、一たびそうした対立抗争が起ると、両者とも互いに、その原因が相手の「体制」にあるのだと攻撃するのを止めてはいない。

ここでは、われわれのおかれている社会とは対立する、社会主義圏からの戦争平和論を解説するのであるが、比較学級には、現実的は生みの諸事件や諸見解を知らせるという観点から、その理論をできるだけ忠実に表現し、いたづらに批判を加えるというやりかたは避けた。

2. 社会主義の立場の平和論で、よく引き合いに出され、また一種の原理論にもなっている、レーニンの帝国主義戦争の理論を中心に、マルクス主義の平和観の骨格を、アジェーションやめくら非難の形ではなく、理論として理解させ、西側資本主義体制攻撃の論拠がなんであるかを明らかにする。

指導内容

レーニンが問題にする戦争は帝国主義戦争といわれ、資本主義社会の一つの発展段階である帝国主義の時代に固有のものに、対象限定されている。

資本制社会の帝国主義段階とはなにか——それは資本制社会の基本的な段階である、産業資本の自由競争の時代とは異なり、生産と資本の集中、集積による独占資本の経済支配の時代であり、それはまた産業資本と結合した、銀行資本の絶大な力によって、金融資本の支配の時代ともいわれている。この金融独占資本はその生産物につけた独占価格によって、中小企業、労働者、農民などから富を収奪し、さらに国家権力を自己の支配の下に動かし、自己に有利な経済政策を遂行する。その上、海外に向ってまで自己の支配権を伸ばし、後進国を植民地化する、といういくつかの特徴的性格をもつ。しかし、帝国主義は資本主義と異なるものではなく、資本主義体制の中での一つの発展段階であることに注意しなければならぬ。だから、帝国主義とは生産手段を一方的に所有する資本家が、生産手段を全く奪われている労働者を搾取することによって生産が続けられる社会体制であることに変わりはない。

ところで、資本家が労働者を搾取するとは、どのようなメカニズムによってなのか。

剰余価値論の原理的な説明に関しては省略する。搾取は、労働者が自らつくりだしたものを、自己の手に入れることによって、自己の力と生きがいを感じずという生命の充足を労働者から奪ってしまう。そのため労働者は、資本家の命ずる外的命令にいやいやながら従って労働するだけとなり、本来人間が自己の個性と能力を発揮し、生きがいを確かめるためのもっとも中核的な場である労働においては、自己の無力と苦痛とだけを感じるよう

になり、喜びを感じるのは休息と娯楽のときだけになってしまう、というみじめな人間疎外の状況におかれる。資本制社会はこうした物質的精神的な害悪を体制として持っている。たとえ戦争がなくても、これが平和といえるだろうか。

ところで資本制社会は、人間に対して与える上のような矛盾のほかに、生産の体制それ自身としても自己矛盾を持っている。それは恐慌において最も顕著な形であられる。すなわち、資本制社会は景気の循環の中で不可避免的に恐慌におそわれるが、そのとき生産過剰現象が生じ、企業は倒産したり、操短をよぎなくされ労働者は不用となって失業させられる。このことは、失業が労働者にとって避けえない宿命であるという意味で、一つの害悪であるのみならず、生産上昇の破壊を周期的に伴う生産体制は、生産の発展によって人間の生活を豊かにしていくという目的で組織された制度としては、自己矛盾を内包していることになる。

帝国主義とは、以上の如く、労働者が商品と同様の存在にさげられてしまい、その剰余労働を搾取され、人間疎外の状況におこまれ、さらに生産の体制として失業の恒久的存在と生産の発展の妨害を免れえない資本制社会の一段階である。それだけではなく、機械設備が巨大となり、生産と資本とにおける集中、集積が一段と進み、独占的金融資本が経済を支配し、国家権力をも自己の意のままに従わせるようになる帝国主義の段階においては、さらに著しい社会悪を生みだすに至る。

この段階では、恐慌によって生産の発展がいくたびか阻止されてきていたが、そのたびに、より高度の機械技術が採用されて、生産力は著しく上昇している。そしてその生産力は特定の生産物については、国内市場における需要をはるかに、しかも恒常的に越えるようになっていく。すなわち、生産の過剰が恒常的になっている。これは資本家の投下した資本から利潤が得られていないということを意味する。資本家にとって資本の投下は、他の資本家に倒されないように少しでも多くの利潤を手に入れるために行われるわけだから、もうけのない産業に投資するわけにはいかない。非過剰部分に投資したらどうか。それをやっただとしても既投資部分の巨大な機械設備を手ばなすわけにはいかないため、過剰すなわち利潤率の低下からは免れない。こうして国内のどの部門でも、殆んど投資＝利潤増の実現のみこみがなくなるわけだが、だからといって資金を遊ばしてはおけない。それは資本家としての自己の没落を意味するからだ。だから、いまや過剰となった資本をなんとか投資するところを確保しなければならない。それは、どこにあるのか？ 内になければ外だ。どんな外国か？ それこそまさに後進国である。なぜなら、同じような帝国主義段階にある国にそれを求めるより、そこに投資した方が、はるかに有利で容易だからだ。こうして資本主義の帝国主義段階にある国、すなわち帝国主義国は、その経済力を土台にした強力な武力によって、後進国を強引に自己の支配下に組みこみ、植民地と化し、その安い労賃や土地を利用せんとして過剰資本の投資市場にしようとするさけがたい必然性をもつ。しかし、こうした帝国主義国の植民地の必要性は一国だけの行動として終るものではない。植民地を獲得できない帝国主義国には、国際的となった資本の競争のなかで、みじめな落伍の運命が待っているだけだからである。それゆえ、帝国主義諸国はきそって、後進地域を中心とした世界の分割を進め、植民地にするための領土の争奪戦を展開するに至る。

ところで、同じ帝国主義といっても、生産の発展の程度は一様ではなく不均等である。

英、米、仏などとくらべて、日、独、伊などは、その資本主義が遅れて発展したために、帝国主義の段階になって植民地を手に入れようとしたときには、世界はもう殆んど分割されつくしていた。しかし、わずかの植民地しか持たない帝国主義国にとっては、自己の資本主義体制としての存立と発展は保証されない。だから持てる国の前に没落しるか、それとも強引に世界の再分割を武力によって行うことによって救われるかのどちらかだ。もちろん前の道はとりえない。こうして帝国主義諸国間の植民地争奪戦は、不可避的に戦争への道を進んでいくのである。これが帝国主義段階における最もいまわしい、不可避の害悪である戦争への道程である。この時代の戦争の原因は、一個の社会体制として搾取と人間疎外などの非人間的矛盾を内包するところの、他ならぬ帝国主義段階における本主義体制そのものにあったわけである。

戦争は帝国主義の存立にとって不可避的な必然性として発現する。このような戦争のもっとも典型的な例は第1次大戦や第2次大戦にみられる。例えば第2次大戦は植民地領土をめぐる（持たざる）帝国主義国、日、独、伊の（持てる）帝国主義国、米、英、仏への攻撃と防衛の帝国主義戦争であったと性格づけられる。もちろん、この大戦はファシズム対反ファシズム戦争という性格を持っている。しかし、もともとファシズムというのは帝国主義段階の資本主義の階級矛盾の激化によって発生してきたものであり、金融独占資本の利益を守るために労働者階級を弾圧し、国民から民主的権利を奪ってつくられた独裁政権であった。したがって、これもまさしく、帝国主義のもつ矛盾を根本的な原因として発現のたわけであって、帝国主義と無縁のものだとは絶対にいえないたちのものである。

以上、帝国主義の時代の戦争の原因は、生産手段を奪われている労働者階級と、労働力を商品として扱う資本家階級との階級対立という根本的矛盾をもった資本主義社会体制に求めざるをえない。

今日、マス・コミは世界が資本主義社会と社会主義社会との両体制に対立して冷戦を続けているといい、両体制の違いが戦争の原因であるかのように報じているが、それは皮相な、またきわめて欺まんのイデオロギー操作である。

なぜなら、社会主義という体制は資本制社会がもつ矛盾—搾取や人間疎外—をとり除く体制として登場したが、そればかりではなく、生産手段が人民所有となり、計画的生産の行われるこの体制は、植民地を獲得しなければ生産をつづけられないとか、体制として存立しえないとかいった矛盾をもってはいない。それどころか、たとえば軍需産業に資金を投ずることは平和産業への発展をそれだけ遅らせることになり、経済の軍事化もこの体制にとってはマイナスの意味しかもたない。

一方、帝国主義段階の資本主義は上記のような体制として戦争への必然性を内包しており、さらに軍需産業への投資が金融独占資本の莫大な利潤源となることと、慢性的不況をなんとかくいとめようとして、鉄鋼、化学製品、その他の需要を生みだせば、あるていど景気が悪化するのを妨げるため、武器、弾薬は使えば使うほど利潤獲得のためにも、需要増大のためにも都合よいという面を持っている。このことから、社会主義体制の軍備は防衛的であるのに対し、資本主義体制は戦争の要因をかかえ、しかも侵略的、攻撃的といえるわけである。

それゆえ、この世から非人間的な矛盾を除去し、戦争を永久にやめさせるには、現在まだ資本主義社会として残っている国々を社会主義社会に変革しなければならぬ。そうすれ

ば戦争の内的要因は人間社会からなくなる。そのさい注意すべきは、社会主義革命は社会主義国が戦争という形で強制するのではなく、その国の労働者や農民たちの自国変革運動として行わなければならない。そして世界各国の社会主義体制への変革が完成していけば、この地上に、搾取と人間疎外と生産の停滞と戦争のない、個人がその能力を自由に発揮して自分の生きがい確かめることが、同時に世界の人間の幸福でもあるような平和を、人間はその手中におさめることができるであろう。

以上がレーニン及びマルクス主義の原理的な平和論である。

生徒の反応

マルクス主義の立場にたったの一方的な理論を展開したわけだから、生徒の側から当然いろいろな疑問や反論がでた。例えば、資本制社会でも計画経済の可能性はあるのではないか、とか、社会主義国が搾取や人間疎外をのぞこうとする体制だといっても、不平等は存在するし、自由の制限だってあるじゃないか、といったものが多かった。

ただ肝心のレーニンの論拠「帝国主義の戦争への必然性」については、諒解したのかあはれたのか、まるで質問がなかったのは意外だった。はじめてきいた理論なので、いささかとまどいを感じているようだが、この理論を真理と受けとるのではなく、おそらく一方的な見方だなと感じている生徒が多かったように見うけられた。しかし現代の世界を動かしている一方の体制の平和論なのだから、これを知らないままにしておいたら、世界の動きや人類の運命に関して、井の中の蛙になってしまう。

反省すべき点としては、ことばの定義をできるだけ明確にすること、論証のすじ道をはっきりさせること、例をもっといれて理論を具体性をもったわかりやすい話にすること、などの必要性を感じた。なお、新聞やテレビのニュース解説などに常々接しているような態度を養えば、もっと理解も深まり、批判力もますのではないかと思われる。

問題点

戦争の要因として、心的態度と社会組織の2つが考えられるが、生徒の一般的傾向、即ち観念の問題としてだけこれを考えている間は国際理解や平和への貢献は、よわよわしいものに終るのではなからうか。そうした観点から出発したが、現実的事件の理解への道は困難なようだ。講義に出てくる語句が、はじめてきく専門的な経済用語だったりしたので、理解しにくかったのではないかと思われる。レーニンの平和論を高一の生徒に一時間で解説するのはむりな感じもする。かれの理論はマルクスの経済学説の上に乗って論述されているわけだから、なおさらむずかしいわけだ。

資料

- レーニン「帝国主義論」
- マルクス「資本論」「経済学哲学草稿」
- 宇野弘蔵「経済原論」
- 武田隆夫「帝国主義論上」
- 岩波講座 現代「冷戦」

指導記録 6

題目「体制と平和」

教官 岡本忠篤

指導目標

1. 「心の中に平和を」築くことは、個人のあり方としては重要であるが、それはともすれば現実を無視しがちである。殆んど戦争は、正義と防衛によって、時には平和を守るために始められ、平和な民衆が血みどろな銃の担い手であったことから、平和を人間社会の問題として考えさせることが必要である。それは、ややもすれば、国家間の不信を深くし、平和への貢献にはならないような印象を与えるが、平和が重要であればある程、現実の中に確固とした平和の条件を見つけ出す努力が、人間として大切である。

2. 平和を確かなものにしようという思想は、兵器の発達が生んだものではない。戦争に巨大な破壊力を与えた科学と高い生産力は本来の目的に従って、人類社会の豊かな今日と輝かしい未来を作る為に奉仕させなければならない。米ソに代表される二つの体制は、この事業に取り組むに際しどのような問題をもっているかを理解させる。それは逆説的に、安定した平和の実現を困難にしている障害が二つの体制のどちらに、より多いかを考えさせる契機にもなるであろう。

指導内容

最初に、相異なる体制の存在、または特定の体制の中に平和の脅威があるという考え方、ついで相異なる体制の共存を主張する考え方を概述し、それぞれ現実的な角度から検討を加えた。(理論的な考察は前時)さらに、共存を安定した平和にする可能性を検討し、軍縮その他、平和共存のもたらす問題をあげてみた。

1. a. 現代の戦争は、帝国主義列強間の矛盾——資本主義発展の不均衡が最も鋭い政治手段としての戦争の形で現われる。また少数の支配的「文明」民族による植民地、従属国支配は、民族解放戦争、反植民地戦争をひき起す。従って、帝国主義段階に達した資本主義においては戦争は不可避である。

b. 共産主義は、力によってのみ維持される全体主義であり、自由の抑圧によって国内に政治的無知を、国外には恐喝外交を強行し、平和の脅威になっている。平和は「自由の共同体」に固有のものであり、「自由の共同体」が全体主義に対する力を持つことによるのみ平和があり得る。

2. 2つの体制はどちらが戦争と深く結合しているか、いわゆる「武装共存」の実状についてみると、例えば1965年度における合衆国の総予算に占める軍事予算は52%で驚くべき高率が維持されていることが注目される。ソ連の予算中に軍事費の占める割合は、1960年で合衆国のその1/5弱、1951年で2/5、1947年、1/2とこの10数年の間に相対的には減少して来たことが指摘し得る。もっとも、ソ連の国家予算の規模が、民間の経済活動のさかんな合衆国より著しく大きな規模を持っていることから、国家予算中の軍事費の比率を米ソで比較することは問題であろうが、別の見地に立てば、ソ連の国家機能が軍事以外に、より大きな比重を持っていると言えないであろうか。

3. 生産力が科学技術の飛躍的な発達によって、現代の平和は人類共存の必要条件になったという事実を発想の起点として、平和共存を説く思想は、両体制の共存のうちに自己の体制の優位を確立しようとする。

4. 平和共存は資本主義体制にとって最低限で現状維持であり、緊張の激化が未来のない破壊と、その生産力を上回る軍備を要求されることによって起り兼ねない階級斗争の尖鋭化を防ぐという意味をもつ。軍縮は平和を確立する前提であるが、資本主義体制は「平和の踏み絵」の前で大きな困難に直面する。「合衆国においても計画的、徐々に進められ

る軍縮は可能である」が「共産圏における軍縮は、技術的な算術に過ぎない」という国連専門委の報告は、戦争と体制のつながりを間接的に指摘していることにもなる。しかし、社会主義体制にとっても、平和共存に問題がないわけではない。現状維持が、植民地従属国の民族解放斗争を否定しかねないからである。

5. 平和共存の思想は究極兵器が生んだものではない。兵器を手にした人類が、自己の状況を洞察した時に到達した思想である。この思想を力にし、安定した平和を作り出すのも人類である。平和が、とりわけ体制と深い関係をもつことを考慮すれば、平和共存が安定した平和に変る条件は、平和を脅かす体制の弱体化に求めなければならない。

6. 平和共存は、それぞれの体制が、自国と、アジア、アフリカ、中南米に広がる広大な後進地域の住民の民生の安定と向上に、どちらがより貢献するかという課題を提供している。今日の平和の危機を、一層破壊的にしている巨大な生産力や、高度な科学技術を駆使して、人類の繁栄に貢献するという競争は、二つの体制の「双方の輝かしい勝利に終る可能性さえ残している。」

反省と問題点

平和を現実の、従ってそれだけ困難な問題として考えさせることは一応出来たと思う。しかし、平和が万人の願いであり、その価値が、かつてないほど大きな今日では、現実を直視する研究を、いわゆる研究の段階にとどめ、今の教育に相応しく位置づけることが、いかに難かしいかを改めて痛感した。「心の中に平和を」という考えが、それなりの安易さで、しかし飽くことなく繰り返される意義もその辺にあるのかも知れない。

講演 1

『ユネスコの浮動について』 ユネスコ国内委員教育課 彦坂春吉氏

ユネスコと申しますのは国際連合の専門機関で、英語で申しますと United Nation Educational Scientific and Cultural Organization と申しております。

私共は、国際理解とか平和とか言っているのですが、皆さんは、戦後、平和の問題で世界的運動、組織にどのようなものがあるか考えたことがございますか。私共、12年前からユネスコの実験教育をやっているのですが、以前に、青少年が、平和という問題にどのような認識を持っているのか調べてみたことがございます。そのときに出てまいりました大きな答が四つございました。一つは、「私は世界連邦というものを知っている」と答えた者が3%位ございました。二つめは「M. R. A. を知っている」というものが3%、その次は「国際連合を知っている」で48%、それから「ユネスコを知っている」が30%ございました。戦後、平和という問題についての世界的組織、運動で大きく考えられるものはその四つのものであると私共も思っております。世界連邦と申しますのは、世界は一つである、一つの政府のもとに世界が一緒になってゆけば対立もなくうまくゆくのではないかという考えで起ってきたもので、第2次大戦後スイスにおこり、現在日本の湯川秀樹先生が会長をしていらっしゃいます。これは世界憲法を持ち、その下に立法、司法、行政といった三権をそなえまして平和を守ってゆこうとしております。それから M. R. A. と申しますのは、第1次大戦の後オックスフォード大学学生から起ってきた運動で、日本語で「道徳再武装運動」、つまり平和を守ってゆくには武器で武装するのではなく、徳目で心を武装するという言わば宗教的な革命運動です。あとの国際連合、ユネスコというのは、この世界

連邦, M. R. A. というものとはっきりと異なっていると思うのですが, 世界連邦, M. R. A. というのは個人の資格で集まってきたもので参加国も少数です。そして国際連合, ユネスコというのは世界各国が国として参加している組織なのです。

さて, ユネスコのことでありますが, 1946年, 今から19年前にできたもので, 現在 117 の国が参加しております。国連の 114 カ国よりも多い。世界で一番大きい組織です。この前の第 13 回総会では, 1965~66 年度の予算が 4,800 万ドルでおよそ 173 億円の予算が決まりました。日本も 4 億 5,000 万円ほど出しております。

それでは一体国際連合とユネスコとはどこがちがうのかと申しますと, 国連というのは集団安全保障という考えから各国が力を合わせて平和を守ってゆこうというもので, 時には武力を使ったりもしますが, その前に勿論話し合いによる解決をしようという組織です。ユネスコというのは, そういった政治的, 軍事的, 経済的なことではなく, 教育, 科学, 文化の領域を通して国際理解と国際協力をすすめて, 世界の共通の福祉に貢献して, 平和の基礎を築いてゆこうとしているわけです。国連とユネスコのちがいは一口で言えば医者と言う治療医学と予防医学のちがいで, 国連には治療医学が, ユネスコには予防医学が相当するわけです。

ユネスコには各国の献金による金の他に, 国連から 5,000 万ドル近くの援助金が入り, その金を各国にばらまいて使うわけですが, 何に一体その金を使うかと言いますと, 一番多いのが教育関係の費用で 3 割ちょっとの金があてられ, 自然科学の費用が 3 割ちょっとかける位, その他文化のためにあてられています。ユネスコの仕事というのをやってもユネスコになってしまいそうですが, ユネスコの仕事には一つのしんみたいなものがありまして, 三つの柱, テーマがあります。一つは「他の国を理解する, 相互理解」それから「人権の尊重」「国際機関の研究」, この三つが柱になっているわけです。特に力を入れている教育活動はどういうことを重点にしているかと申しますと, 「世界中の義務教育をさかんにする」「基礎教育(文盲退治)」「国際理解教育」の三つが主な活動になっているわけです。義務教育の問題につきましては, ユネスコでは, アフリカ, ラテン・アメリカ, アラブ諸国, アジアの 4 地域の義務教育拡大計画をやっております。アジアについてみますと, 1961 年から 1980 年までの 20 年間に, アジア加盟各国 20 ヶ国に最低 7 年間の義務教育をひこうとしています。これには 20 兆 3,000 億という膨大な金がかかり, 何十万という先生の育成, 学校建設と大変な仕事なのです。それからもう一つの基礎教育の問題につきましては, 世界中の 15 才以上の大人(成人)の中に 7 億の文盲者がいるといわれています。これは大人の $\frac{2}{5}$ にあたり, これがいるかぎり, 国際理解というものはできないのだという考えから, 文盲の撲滅ということが大きくとりあげられています。義務教育, 基礎教育の二つの面にユネスコは低開発国援助ということで大変力を入れているわけで, 日本もこれを助けるという立場からこの仕事に協力しているわけです。三番目の国際理解教育の問題については教育の内容改善ということから, 色々と世界中に呼びかけてこの 10 年間やってきたわけです。日本も 10 年前から参加しましてこの駒場附属高校も含めまして, 現在世界中で 300 校, 48 カ国から 50 カ国位が参加して国際理解教育の研究に励んでいるわけです。

3本の柱のいちばんもとなる考え方があると私は考えているわけですが, ユネスコのやる仕事のもとなる考え方というのはユネスコ憲章の前文にあらわれているわけです。「戦争は人の心の中にはじまるものであるから平和のとりでは人の心の中に築かねばなら

ない」というのがユネスコ憲章のはじめなのです。今の最高裁長官の横田先生から「世界中で、経済的政治的とりきめで、やぶられなかった条約、協定はない」ということをうかがったことがございます。つまり横田先生のおっしゃるのは、そのとりきめを結ぶ基礎に精神的つながり、信頼がなければとてもいけないのだということなのですが、そういったことがユネスコ憲章の中に、前文の中にあらわれているわけです。「戦争は人の心の中に……」にひきつづきまして「つまり政治的経済的とりきめのみに基づく平和は永続しない。人類の知的及び精神的連帯の上にきづかれなければならない」ということが書いてあります。つまり、ユネスコは政治的経済的とりきめの基礎になる心のつながりをつくっていかねばならないのだということをおっしゃっているわけです。またその少し先に「相互の風習と生活を知らないことは疑惑と不信をうみ、ひいては戦争になる」。先の戦争は「無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義を広めることによっておこった。」このように他国の理解と人権の尊重が争いをなくすものであるということをおっしゃっていることをやって欲しいと言っているわけです。勿論国際機関、つまり国際連合とその13専門機関を勉強し、それに協力していただく、これが国際平和を守っていく基礎であると考えられるわけです。

講演 2

「国連と世界平和」

毎日新聞社 山内 大介氏

勤務先の国連から帰ってまいりまして、もう1年半になります。1960年から1963年の8月までニューヨークの毎日新聞の特派員として滞在しておりまして、国連の動きを細かく見てまいりました。

ご存知の通り、国連、つまり世界の議会は誕生以来、今年で20才を迎えます。誕生当時、51カ国の加盟国から成り立っていたのが、今では114カ国と2倍以上に大きく成長しています。人間で言うなら成年式を迎えるというわけで、身体も大変大きくなりましたし、体質も昔の子どもとはちがって筋骨たくましい立派な青年になったわけです。それだけにいろいろなむずかしい問題をかかえています。つい最近では、インドネシアの脱退という事件が起こりましたし、また、去年の11月9日から開かれております第19回総会でも、国連の分担金問題をめぐってアメリカとソ連側との対立があり、そのために通常の投票を行なうことができないというような、変則的な形の国連総会が開かれています。さらにこの国連総会が今後直面する大きな問題のひとつとして、中国の代表権問題というのがあります。これには昨年10月に、ソ連のフルシチョフ首相の退陣問題が起こったのといふ前後しまして、中共が遂に核爆発実験に成功するというような事件がからまっています。これをきっかけにして、中共を国連に入れるべきだという論議も今まで以上に活発になっておりますし、今年は無理としても、20回総会には中共加盟という方向が急激に出てくるのではないかとされています。このように20才を迎えようという国連が歴史始まって以来最大の難関に直面していると言えるわけです。

今、国連で問題になっている分担金問題について、それがどういう意味を持つものであり、どういう経緯によるものであるのか少し話をしてみます。

国連の経費は、各加盟国の献金によってまかなわれています。そして通常の経費の他に、世界に大きな紛争が起こった時に特別の出費が出てまいります。その良い例が1960年から始まりましたコンゴ動乱、またその4年前のスエズ動乱のときにありました。つまりこの時

派遣された国連軍の費用は、通常経費に入っていなかったのです。そこで出兵費用をどんな形で出すかが問題になったわけです。世界的な関心をよんだこのスエズ、コンゴ動乱については、結局、第17回国連総会が通常の国連経費と同じ扱いにすべきであるとして、つまり通常の経費に含めてしまひまして、これをそれぞれ決められた分担比率によって負担すべきだ、要するに国連加盟国の義務費であるということに決まりました。これに対して文句を言いましたのがソ連はじめ、共産国、フランス、その他南アフリカ連邦等であります。

ソ連の言うには、スエズの時には国連安全保障理事会で国連軍派兵の決定ができなかったすきに、緊急国連総会がそれを決定してしまった。それは国連憲章で定めた理事国の拒否権を無視している。また、コンゴの時には安保理が派兵をきめたが、当時の国連事務総長のハマーショルドが、はじめの中立、公正な立場からだんだん西欧側に傾いた。だからいずれも国連憲章違反である。というわけで分担に応じない態度をとっております。ソ連の真意としては、スエズにせよコンゴにせよ、西欧植民国が自分達の利益を守るために勝手な戦争をやって勝手なやり方で収拾した。それなら自分達が直接責任をとって、費用も自分達だけで分担したらどうだということなのです。

今、国連の赤字は1億3,000万ドル位残っておりまして、未払い分を放任しておくくと国連の台所が苦しいのみならず、今後の各国に及ぼす影響もはかり知れないもので、なんとしても払ってもらおうとする動きがアメリカ中心に強いわけです。さて、国連憲章に、国連経費を2年分以上滞納した国は総会での投票権を持たない、という項がありますが、アメリカがこれを楯にとりまして、ソ連には投票権がないのだと言うわけです。こういう対立のまま総会を開くとはじめから問題が出てきまして、議場の混乱は必至です。そこで妥協案が出てきて、一時的に、一切票決を必要とする問題はあとまわしにし、議長を選出その他は舞台裏工作で話をつけることにしてすべり出したのが、12月1日に開かれました第19回国連総会だったわけです。

そこで、また出てきたのが安保理の非常任理事国の問題で、当事国は年内に任期が切れます。そこで、どうしても改選をやらなければなりません。結局、国連議場の外の総会議長の部屋で非公式の投票がありまして決まりました。その中にマレーシアが入っていたことが、マレーシアと仲の悪いインドネシアの国連脱退問題となったわけです。

やがて第19回総会が直面しなければなりません中国代表権問題というのは、国連の大きな問題のひとつですが、これはどういうことかと言いますと、6億5,000とか6億8,000、場合によっては7億の民と言われます中国本土の中共政府が、いまだに国連の議場から閉めだされているという状態がおかしなものに見えるわけです。これは確かに7億の民と、あの広大な地域を支配しております中共が国連から閉めだされているのはおかしい。当然国連に入るべきです。ところが、中共加盟というのが中国代表権問題でして、結局新しく中共が国連に入るという問題でなく、現実にも今、中国というのが国連に議席を持っているが、その議席を代表するのが中国本土にある共産政権であるのか、それとも昔ながらに中華民国と呼称している台湾の国府政権であるのかという問題なのです。問題は、ひとつの議席をどちらが代表するかという形になっているところにあるわけでして、しかも中共側も国府側も二つの中国は認めないという言い方をどちらもして、両方とも入るということを許さないというのが当事国の立場なのです。そこへ持ってきて、たかだか人口1,100万人位の台湾にしがみついている国府などは無視しても良いじゃないかという新興

諸国が強くなってきたため、国府を追い払って中共を入れるという主張が強くなってきました。もうひとつ、今まで中共の国連加盟に反対してきた国も、去年の10月に中共が遂に核実験に成功いたしましたので、いわば、核の芽をもったという状態ですので、国連という世界の議場の外に野放しにしておくよりも、国連の中に入れて監視した方が有利ではないかという意見も出ております。しかし、アメリカは依然として中共を認めない立場をとり続けようとしていますし、日本もそれに力を貸そうとしています。いずれにしても中国問題というのは波及するところが大きく、一朝一夕にひとつにしばるといって解決できないのが現状です。

この他に、今、国連が直面している問題はいろいろありますが、特にこの2、3年来、大きな問題となって来た南北問題というのが、これもまた、日本の役割ともからんで注目されております。

今後の日本が考えねばならぬことは、今の段階では必ずしも日本の利益に直接的には国連が結びついているようには思えませんけれども、戦後20年、いろいろ問題もありますし、これからもあるでしょう。この国連も世界平和という点では確かにひとつの人類史にない役割をになってきたわけですし、自国も生き、他国も生きるひとつの大きなよりどころが国連だと考えて、やはり国連中心主義というのは、決して意味がないのではないということをも充分認識しなければならないと思います。

講演 3

「核時代」科学

教育大物理学教室 中村 洪介氏

核時代の自然科学の話ということですが、20世紀も65年たちまして、私達がどういうことを中心的な問題として、毎日研究をすすめているかということを中心にお話ししたいと思います。

現代物理学の最も中心的な問題の一つは、物質がどんな構造のものか、それを決めることにあるといってもかまいません。我々は見たところ一様に連続的に見える物質でも、実は、それが非常に小さな原子からできあがっていると考えています。物質が非常に小さな原子からできあがっているという考えは、何も今世紀になって始まったことではなく、遠くギリシャの哲学者も考えていたことです。例えばエンペロクロスの4元素説等があります。これは今日からするとあまり科学的ではないのですが、物質が何かある一つの単位から成り立っていると考えました。こういう考え方は今日の20世紀にも生きています。しかし、私達も物質観はそう古いままのものではないことは、ギリシャの哲学者の例をとらなくとも19世紀の学者と比べてもわかります。19世紀の物理学者はどのように原子を考えていたかといいますと、原子はこれ以上分割できないものであるとしていました。20世紀に於ては、原子はこれ以上分けられないというのではなくて、もっと小さい、より基本的な粒子から構成されていると考えられています。

即ち、原子には、中心にプラスの電気を持った1個の核があり、この核のまわりをマイナスの電気を持った電子がとりまいています。この原子核の大きさはといいますと、原子の大体1万分の1位の小さな半径を持ったものです。電子というものが、大きさを持っているかどうかということは、まだ明らかにされていません。

少し対象を小さい方にうつし、原子核の構造を調べてみましょう。原子核にはいろいろ

な重さのものがありますが、その重さは大体において、一番軽い水素原子核の整数倍です。その電気量も水素原子核の電気量の整数倍です。例えば、ヘリウムの原子核の重さは水素原子核の4倍、電気量は2倍という整数値をもっています。このことは、原子核が何か基本的な粒子、例えば水素原子核の何個かの集まりではないかということを考えさせます。つまり原子核というのは、決して分けられないというのではなく、より基本になる単位のものがある、その何個かから成り立っているのではないかということを暗示します。これを裏付ける実験的事実として、原子の放射能の問題があります。例えば、ラジウムの原子核はヘリウムの原子核を自然に放出し、自分はラドンという原子核にかわりまします。そういう現象が、実験から或は観察の結果からわかっています。最近では更に、人工的に原子核をぶつけてこわしてしまう実験が行われています。水素原子核やヘリウム原子核を使っての実験は、かなりやられています。また、非常に最近ですが、これより重いリシウムや酸素の原子核をぶつける技術もつくられています。

さてこのように原子核をぶつけますと、多くの原子核はまた、ここからヘリウム原子核とか水素の原子核とかをとび出させます。これを核反応といいます。こういう反応ばかりでなく或る時は、電子や光がとび出してきたりすることもあります。

1932年にイギリスのチャドウィックは、ある原子核にこういうものをぶつけて反応を起させたところ、これまでに全く知られていなかった新しい粒子がとび出すのを観察しました。その粒子は、重さは水素原子核とほぼ同じだが、電子は持っていない、中性粒子というものでした。この中性粒子の実験から、すべての原子核をつくっている構成粒子は、水素原子と、新しく発見された中性粒子とからできているのではないかと考えられるようになりました。そこでこの2つの粒子は、物理学者により水素原子核は陽子、中性の粒子には中性子と名付けられました。しかし先ほど、原子核を攻撃するとき、ある時は電気や光がでてくるといいましたので、原子核の構成要素に電子も含まれるのではないかと考える人がいるかも知れません。原子核の中に電子があると考えることはいろいろ困難な点がありますので、今日ではそういう考えはできません。電子がでてくるのは、電子が原子核の中で新しくつくられて出てくるのであって、もともと原子核の中にあつたのではないと考えられるようになりました。こうして現在では、原子核は陽子と中性子からつくられていると考えられています。何度も申しますが、原子核のうち一番かんたんなのは水素原子核で、陽子1個からできていますので、構造とか何とかの問題はありません。2番目に簡単な原子核は重陽子と呼ばれるもので、陽子2個、中性子1個からできています。そこで陽子1個と中性子1個からなるということは、どういうことを我々に教えるか考えてみましょう。2つの粒子が結合して1つの原子核をつくっているのですから、その為には、何かお互いの間に引き合う力が働いていなければなりません。この中性子と陽子の間の力の性質について、ラザフォードやその他多くの人の実験により、今日、明らかにされています。即ち、中性子と陽子の間には、万有引力或は電気的な引力よりももっと強い力（大体、電気的力のざっと50倍位）が働いていること、更にお互いの力の及ぼし合う距離は非常に小さいということです。またそういう力は陽子と陽子との間にも、間接的には中性子と中性子の間にも働いていることが明らかになりました。この力を我々は核力と呼んでいます。核力の大きさ、その到達距離が今日明らかになってきたので、原子核の構造はだいぶわかりやすくなってきたわけですが、理論の問題は数学的にかなり困難です。原子の構造は小

さな太陽系にも等しいのですが、原子核の構造は、あまりそれに近くないといえます。だから原子核の構造がどういう具合になっているかということは、今日、第一線物理学者の等しく興味あるところでは。

原子核と原子の違いの大きな点は、原子はかなりすき間の多いものですが、原子核は中性子と陽子がかかなりビッシリつまっていて、それを通りぬけるのがなかなか難かしいものです。だから原子核を非常にネバネバした液体のように考える人もいます。こう考えますと、核反応も、ちょうど液体を熱して分子が蒸発する現象と同じように理解することもできます。つまり原子核に他の原子核をぶつける時、かなりのエネルギーを持っているので、液滴を熱するが、全て一様に熱せられるというのではなく、たまたま特定のものに熱が与えられることもあり、そうしたものが外にとび出すということです。原子核を人工的に転換させる方法は、このような機構によって行われます。そのときの弾丸は主として中性子をつかいます。

さて、次の問題ですが、放射能の話に入ります。先ほど、 α 粒子を外に出して自分は別の原子核になる例をあげましたが、これを α 放射能といい、電子を外に放出するのは β 放射能といいます。電子はすでに述べたように原子核の中に最初から存在していたわけではありません。それにもかかわらず β 放射能を持つ原子核が存在するのは何故かということでは、1933~35年頃の物理学者の興味ある問題でした。これに解答を与えたのが、日本の湯川博士の中間子の発見です。新しい粒子（中間子）を導入して、核力と β 放射能との現象を統一的に説明しようとしたところに偉大な点があります。こうして、かなりの程度まで原子核の問題は明らかにされました。しかし原子核の問題は、今日でも完全にはわかっていません。日夜、物理学者のとりくんでいる問題ですが、それと併行して、最近では原子核のエネルギーを取り出す応用面、技術面での進歩があります。核分裂、融合反応などの改革がすすんできまして、例えば原子力船や原子爆弾などもつくられています。

しかし、大事なことは、結論的に申し上げますと、我々はとかく新聞などの大きな活字にばかり注目し、あまり背後の意味がわからないのに、いろいろ発言することがあります。しかし、こうしたやり方は科学的ではありません。平和の問題、エネルギーの利用方法を考えるときでも、いつでも基本的な考え方をするようにし、今迄の多くの人々の努力が、どうすれば一番有効に明日の科学の進展と結びつくかということ、ひとひとりが考えねばなりません。

重ねて強調することは、新聞や何かの大きな見出し等にふりまわされるのではなく、自分自身の考え方をもって、いつでも科学的な立場というものを失ってはいけないということをお願いしたいと思います。

講演 4

「宗教と平和」

教育大学教授 山本 光氏

私が今日お話し申し上げたいと思っているのは、別に、世界中が仏教徒になれば平和が来るとか、そんな変なことを申し上げるつもりはありません。あるひとつの宗教に入っていれば病気もおさるし、金持になるというような、そんな妙なことはあるはずがないと私は思います。病気をなおそうと思えば、これは自然科学、特に医学の力を借りるのが当り前ですし、貧乏をなくそうと思えば、社会科学を勉強したり、社会のいろいろなしくみを

できるだけさぐっていき、政治の力をもってなおしてもらうのが当たり前ではないかと思うのです。しかし、みんなが病気もしないし、貧乏の苦しみもないとそれぞれ良いかという決してそうではないと思うのです。スウェーデンなんていう国が非常に福祉施設が進んでいるそうですが、それにもかかわらず老人の自殺が世界一多いと聞いています。自然科学、社会科学とか、あるいは政治という領域と別の領域を宗教が持っているのではないかと思います。だから決して矛盾するものでもないし、別に、けんかして縄張り争いをするものではないと思っています。ただ今、領域が違うということを申しあげましたが、諸君が勉強しておられる自然科学でしたら、自分というものに対する外界、まあ、主観と客観といいますが、そういう自分に対する外のものを観察したり実験してみたりして、それから原理を出してくるものです。それから、思想のようなものと、抽象的な概念をとり扱っている。ところが宗教というのはそういうものじゃないんですね。宗教というのは個人個人の体験なんです。生きた体験でなくてはならないわけですし、体験ですから勿論個人のことということになると思います。

たとえば、お釈迦様の言葉で「天上天下唯我独尊」という言葉がありますね。これは、天上天下、ただ俺だけが偉いんだ、というわけではないと思います。ほんとうの自分というものは天地宇宙と一体のものなのだというわけです。そういう言葉だとか、真宗の親鸞上人も「歎異抄」という有名な本の中で「弥陀の五劫思惟の願をよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」ということを書いています。衆生全部を救っていくという弥陀の願いも、よく考えてみると、親鸞一人のためだったというようなことを言っているわけです。禅の中では、唐の時代に百丈と言う有名な坊さんがいるのですが、この百丈禅師に、世の中でありがたいというのは何だろう、というような質問をしていった時に「独座す大雄峰。」何がありがたいといって、自分がこの百丈山大雄峰にデンと座りこんでいること、自分が今ここにこうしていることが一番ありがたいことだと言っています。このような言葉をひっぱってきましたが、自分自身ということが問題なんですね。宗教では、自分ひとりの生きた体験というのが大事なんです。

体験というと、一体何を体験するのかというようなことにもなるわけですが、釈迦が靈鷲山で説法したときに、金婆羅華という花を手でもてあそんでにっこり笑ったという話があります。そして、聞いてた人達には何のことも判らなかったのですが、多数の弟子、たとえば多聞第一の阿難尊者、智恵第一といわれる舍利弗（シャリホツ）など大勢いる中で体験や実行を尊ぶ迦葉尊者ただひとりが、それを見てにっこりと笑ったというのです。それは言うに言われぬものがあるのです。この時の釈尊の言葉の中に「不立文字、教外別伝」という言葉があります。これは文字にとらわれていては駄目なので、元来、教えることのできないものなのだということなのです。

よく無念無想、三昧などと言いますが、体験するというのはこういうことを体験するのです。これは夢我夢中というのとは違って、ある程度余裕があるといいますが、何か突発的な事故が起きたときにも、それに応じるようなゆとりがあるのが、無念無想なんだということなのです。

村松桐風氏の話なんです、清水の次郎長が一生のうちに真剣勝負を何十ぺんとかやっているんですが、別に剣術も何も知らないのに、あまり負けたことがない。その秘訣というのは、2人の刀のきっ先がふれる位近くなった時に、相手の刀のきっ先にちょっとさわ

ってみて、その時にグッと押しかえしてきたら、その瞬間に相手をたたっ切ってしまうというのだそうですが、中には刀でちょっと押すと、まるでのれんに腕おしっていうんですか、さっぱり手応えのないのがあるそうですが、そういうのは、もう非常にできる人間なので、そんな時には刀をひっかきついで逃げちまうというのが秘訣なんだそうです。それは何故かという、そういう達人の心は自由でとらわれていないというんですね。どこにも気持がとらわれていないということなんです。とられることのない心、そういうものを沢庵禅師は「無住」といっています。

それについて面白い話がありまして、徳川吉宗時代の本で「猫の妙術」という本があるんですが、その中で、ある剣術家の家でねずみが出て困るというので、ねずみとりの上手な猫をたくさんつれてきたところが、どの猫も失敗してしまう。そして最後に、老いぼれた古猫をつれてきたところが、それがねずみをつかまえてしまった。そしてその猫が言うには、自分がねずみをつかまえられたのは、全然作意がない、無心でもって自然にやっているからであると言ったそうで、他の猫がなるほどとうなずいたそうです。そして最後に「何を敵なく我なし」ということに古猫が答えて「我なければ敵なし」というんですね。「敵というのはもつと^{ないたい}對待の名なり。陰陽水火の^{たぐい}類のごとし。およそ物形象あるものは必らず対するものあり。我が心に^{かたち}象なければ対するものなし。対するものなきときはくらぶるものなし。これを敵もなく我もなしと言う。心と象とともに忘れて潭然として無事なる時は和して一なり。」あとの方に「この心潭然として無事なる時は、世界は我世界なり……」まあこんなことを書いてあるんです。

敵というような感じがあるときは、なかなか平和というようなことは難しいことで、相対する敵という感じのなくなる、そういう気持を体験するということが禅の根本なんでして、そういう境地に立って、もう一度世の中を見回していきたい。そういうことが、平和ということを考えるひとつの立場でもあるのではないかと申しあげようと思ったんです。

どうして、そういう風になれるかと言うと、禅というものは、そのひとつの方法として座禅姿勢を正す、息をととのえる、そんなある型にはまったことをしているうちに、外界と自分との対立がなくなる境地というものを体験できるわけで、これは誰でもいくと思うのです。気を静めているうちに無念無想というようなところに行く、だが、ただそれだけではちょっと物足りないのです。そうやって気が静まったときになにかきっかけがあってパッといこう、なるほどこれかということを経験することがあるので、私が言うのはその体験なのですね。これは禅だけでなく、宗教というものはみんなそういうことを言っているのではないかと思うのです。人間というものは赤ん坊のときには、自分も他人もないわけで、それがだんだん、この5尺の身体だけが自分で、あとは外界だと思えるようになる。キリストも言っていますが、赤ん坊の気持ちにならなければ天国には行けないというように、一度、自他のない境地にかえてみて、この立場から、科学を使い、政治を行うようにあらゆる努力をするということが、平和実現のために必要ではないかと思うのです。

講演 5

「欧米の若い世代の平和観につて」

教官 白木 博也

講演内容は、平和の問題で話して欲しいということでしたが、私自身、アメリカからヨ

ヨーロッパに旅行して、平和というテーマで話し合ったことはなく、いろいろな人との人生問題等の会話の中から平和に関連することができたということです。ここで「平和」といいましたが、むしろこの言葉より「自由」という言葉の方が多くでてきました。「自由のないところに平和はない」ということですから、平和ということのかわりに自由とおきかえているのかも知れません。

話の順序は次にあげるように、アメリカから2人、イギリス人から2人……という具合に選び出し、ここでお話する話の内容は、それら多くの人々との会話の抜粋です。

それでは一番初めにアメリカからいきます。ひとりはサンフランシスコのある絵かきで、ウィーン生まれのユダヤ人ということで、非常にニヒリスティックな感じの男です。彼との話の中から、ユダヤ人は今でもヨーロッパ中から嫌われていることを知りました。アメリカもソ連も嫌いだが、サンフランシスコとニューヨークには自由があるから好きだと彼は言いました。平和ということは口に出なかったが、自由を求めて住んでいるということで少し興味深く思いました。

もうひとつは、ニューヨークで会った黒人の話。不言実行型で、いろいろなことをしている男です。例えば、当時米国の大統領選挙の最中だったが、黒人の中にはジョンソンもゴールド・ウォーターも駄目だから棄権するというが多かったので、彼は仲間といっしょに棄権防止のパンフレットをつくってまいてと話しました。またちょうどその頃、南部の黒人2名が殺された事件が起り、これにも街頭で資金カンパをやっていました。会話の中に平和や自由のことばは出ませんが、実際に行動している不言実行型といえます。アメリカで2つの対照的な例（一方は消極的、他方は不言実行型の積極的タイプ）をあげましたが、次にイギリスにいきます。

あるホテルに泊った時のことですが、当時イギリスでも保守党と労働党の選挙が行われていたので、そこの主人にきいてみました。ホテルの経営をしているので、一応プチブルなので保守党かと思ったら「勿論労働党が好きだ」と答えたので少し驚きました。「保守党はもう何年もやったから、この辺で労働党にかわってもいい。とにかく、このままだんだん生活が良くなっていけばいい」というようなことを言っていました。おそらく、労働党も保守党も大差ないと考えているのではないかと思いました。

次にフランスのパリでのこと、ルーブル美術館で会った人との会話です。前日、朝日ジャーナルの記事で、フランスのレジスタンスのことが書いてあったのを覚えていたので「あなたもレジスタンスをやったか」ときいたところが、「やらない。フランス国民はやらなかった。もっとも指導者はやっていたが」という答えでした。また、彼は「ドゴールも嫌いだしソビエト、アメリカも嫌いだ。とくにアメリカはインドシナでの下手なやり方で面白くない」というのです。当時フランスの新聞には、連日のように「南ヴェトナムの民衆はベトコンの旗をもっている」という段階にきていることを指摘していました。そこでのアメリカのヴェトナム政策の失敗を叩いていました。結局、フランスのいうとおりにしていればよかったのに、アメリカがよけいな手を出したというのです。また、本人は、今の生活がずっと続いてくれるのが平和なことだというのです。しかし、今の状態というのは冷戦の下での平和ということで、あまり意味がないのですが、とにかくそういうことでした。

もうひとり、フランスの若い学生と会ったときの話をしましょう。東ドイツと西ドイツ

の境の町で会ったときの話です。その学生のいうことには「ドイツ人はなんて馬鹿なんだ。こんな状態で満足しているなんて。フランス人は今迄平和の為には何でもしてきた。フランスでは政治的自由も共存している。」ということでした。実際、フランスでは政治的自由は寛容であり、例えば、共産党の旗の横に右翼の旗が破られずにはあってあたりするのをよく見ます。「ドイツ人は平和を犠牲にしてまでも反共強化になっている」というので、この人は資本主義嫌いだなと思って「好きな政治家は？」ときくと、すかさず「フルシチョフ」と答えたのです。それから後にフランスに着いたのですが、その時にはフルシチョフはもういなかったのです。そのようにして、次にドイツにうつります。

ドイツのペイション（ホテルより一段階級の低いところ）に入ったときの主人との会話です。東ドイツの話になったとき「コミニユストの指導者はえらい。汚職をしないからだ。エアハルトやアデナウアーは嫌いだ。しかし、コミニユズムは宗教を否定するからいやだ。」というのです。政治に対する失望はかなり強く、宗教に対しては非常に敏感でした。従ってドイツの分割の問題については何ら方策ももっていないということでした。

もうひとり、ドイツの汽車の中で、40がらみの男がやってきて「この山の向うは共産主義の国、チェコだ」というので「共産主義好きかい」というと「いや嫌いだ」というのです。話が昔にもどってヒットラーの話になると「ヒットラーは悪い奴だ」と怒り顔になる。ドイツでは右翼がのびてきていると新聞などでいわれていますが、そういうことは少しも見られませんでした。話がヒロシマることになると、とたんに真顔になって「アメリカは悪い奴だ」というのです。私が感じたことは、ここではアメリカもソ連もよく思われていないということです。両方の谷間でつかの間の平和をえているのがドイツの状況だということでした。しかし両側にとってケネディだけは例外で非常に評判がよかったのです。

今度はイタリアに入ります。ヴェニスで公園でピラマキをしていた大部年とった学生と話しました。レーニンの演説している写真の入ったパンフレットを持っていたので、共産党の人らしかったけれど、その態度は、いかにもイタリア的で大らかな感じがしました。ちなみにイタリアの学生のデモを見ましたが、陽気なもので、こうしたことからイタリアの特色がわかりました。こうしたことは、もうひとつのイタリアの例からもわかります。元軍人の50がらみの男の人ですが、彼の哲学によると「資本主義と共産主義の両方のいいところをとり入れればよい」というのです。日本ではどうも考えられないのですが、事実、キリスト教民主党というのがあります。

イタリアは終って、アメリカ人の夫とドイツ人の奥さんと会った時の話です。いろいろ話していて、最後に奥さんが「あなたを知って、日本をより理解しました。あなたもアメリカやドイツを知ったでしょう。世界の人がこうして、ブラブラ旅行ができれば世界は幸福です」といいました。非常に印象に残ったことばです。

次にカイロにいきまして、そこで一人の男と会ったのですが、宗教の話になり、私が無神論者だということとびっくりされました。「信ずるものがなくてよく生きていけますね。」確かにエジプト人は貧しくても非常に生き生きしていると思いました。

以上で終るわけですが、これまで自由とか平和とかコミニユズムとかいろいろなことばが出てきましたが、平和というものに一面つながっていると思ったからお話ししたわけです。

講演 6

「最近 国際情勢と平和問題」

東京大学教授 坂本 義和氏

現在の日本では、平和ということが論じられるまでもなく自明のことであるようになってきています。それは長期計画が立てられたり、親達が子供の幼稚園の入園を将来の大学入学ということまで考えて決めていることにもあらわれています。このように、平和ということが、一応なり立っているのは、どうしてなのでしょう。今の平和というのは、何によって保障されているのでしょうか。

今日の私の話はまず『力の均衡』が平和を保障している」特に「核兵器の均衡状態が平和を保障している」という考え方を取りあげてみます。

さて、力の均衡とは一体何なのでしょう。この言葉は大変あいまいなままで使われていますが、よく整理してみますと三つの違った意味があります。

1. 政策としての力の均衡——存在している国際関係の大枠を維持していくという目的で手段としての力の均衡をはかる。
2. 状態としての力の均衡——世界の主だった大国の間の関係がだいたい均衡している状態。
3. ごまかしとしての力の均衡——実際の、ある政策をごまかすために言われる。

この三つです。そして普通、力の均衡の意味するものは第一義的には、軍事的な力のことです。そして政策としての力の均衡は、例えば、日米安保体制とか、NATOなどの軍事同盟とか、軍備競争などという形をとってくるのですが、これにどんな問題があるかと言うと、ある国際関係を維持するために軍事力の均衡を維持していこうという場合は、力というものが、かなり正確に測れるし、比較できるということが前提となっています。ところが、国力などというものは、もともとはっきりしないものですから、その間で均衡をはかろうとするには、いつでもこちら側を少し多めにしておかなければ安心できません。ところが相手方もやはり優越しようとしています。そこで、これが悪循環となって、第2の状態としての力の均衡というものを絶えずこわしていくことになるのです。それにもかかわらず、自分のとっている政策は国際的均衡のためであるとお互いに主張するのですが、そうするとこれが第3のごまかしになるわけです。

このように、力の均衡政策はいつのまにか均衡状態をこわしていくのですが、結局、それが力の均衡政策のとっている矛盾というわけです。それにもかかわらず、力の均衡が平和に役立つと考えられているのはどうしてでしょうか。その考えがはっきりした形で出たのがヨーロッパの歴史でいう18世紀のことで、この時期に大変、この力の均衡政策がとられ、良い政策だと思われていました。それは、戦争という手段にうたてても、大国の間の関係が大きく動かされることがないからで、大きな国のバランスを保つためには、小さな国の独立などはどうでもよかったのです。そして、その頃、大国の間で徹底的な戦争がなかったのは、ヨーロッパがイデオロギーという点で非常に似ていたからです。ヨーロッパは一つであったと言えるのです。国際社会の中で非常にちがったイデオロギーの対立がある時には、均衡ということは難かしくなります。現に、フランス革命後には、各国に革命と反革命という考えの対立がおこりました。この二つは、どちらかが善でありどちらかが悪であるという関係です。各国の間に善悪の関係ができると、共存ということは許されま

せん。そこで革命後のフランスを各国は徹底的にたたき、フランス革命のなごりのあるものは全部たたきつぶして、もう一度昔の王様をつれてきて安心したいという終わり方をしました。これは、基本的にイデオロギーのちがう場合に均衡ということは有り得ないということなのです。

戦後の歴史は2期に分けられます。それは、特に米ソ関係についてなのですが、1953年までを第1期、その後を第2期としますと、第1期の特徴はアメリカとソ連とのイデオロギーの対立が厳しかった時です。国際社会が全くちがった二つの世界観で、ひきさかれていたのです。また、同時に、力の均衡政策が重なり合うことによって、東西間の激的な軍備競争が行なわれ、朝鮮戦争という問題にまで発展しました。この頃には、戦争は避けられないと考えられていました。その考え方を端的にあらわしていたのが核兵器の開発です。核兵器は、局部的でなく、全部を破壊するというものです。それを競争して開発していたのです。これが、大体53年まで続いたのですが、53年頃からそれが少しずつ変わってきました。短期的には小さな戦争があるかも知れないが、長期的には平和的共存が可能になるという前提に立った政策に変わったのです。これは1953年にソ連も水爆実験に成功し、どちらにも相手を皆殺しにすることができるようになったため、核兵器の今までの意味が失われ、あるとすれば、戦争を避けるための、抑止するためのものになってしまったからです。抑止という考え方が成り立つのはどういう場合かという、一つは、アメリカの立場で言えば、ソ連がもしアメリカを攻撃すれば、アメリカもソ連に全力を投入する。すると、どうしても計算に合わないだろう。だから、ソ連はそんなことをしないだろう。という考え方に立っているからです。つまり、ソ連の政府、政治指導者が合理的にものを考えられる、ということを経験しているからです。ソ連の場合も同様です。

合理的にものが考えられるということは、一つには、政策をきめる人間が、ある政策をとればどういう結果になるかを見通す能力を持っていること。二つには、見通した結果を望まないということです。抑止という考えの前提には、自滅の危険をおかすことはないだろうと考え方があつたのです。

要するに、アメリカもソ連もいろいろな意味でイデオロギーが違うというけれど、最終的には、アメリカも民主主義だと言っているし、ソ連もこちらの方が本当の民主主義だと言っています。マルクス主義から考えると、資本主義的民主主義は本当の民主主義ではないのですが、いずれにしろ、どちらも民主主義だと言っていることは共通です。

これは最終的には、政治の権力が国民に対して責任を負っているということで、そのことについては、アメリカもソ連も共通している。それが前提なのです。そういう意味で、核兵器が出現したことだけでは、力の均衡とか平和が生まれてくることにはならないのであって、核兵器をもった力が最終的に民衆に対して責任をもつということを受け入れている国であるということにより、平和共存が生まれてくるのです。

講演 7

「軍縮問題」

朝日新聞社論説委員 渡辺誠毅氏

軍縮という言葉には二つの定義がある。即ち、Arm Control to Disarmament の問題である。Arm Control そのものは軍備管理ということであるが、この究極の目的は軍縮(disarmament)ということである。軍備管理ということは、アメリカの唱える軍縮方法

の一形態で、アフリカ諸国等を非核武装地帯と指定し、ここに核武装また、核兵器持ち込みを禁止しようというのである。この非核武装地帯のより多くの設置が、世界の緊張緩和への一志向となるのであるという。アメリカはソ連のいう徹底的完全軍縮よりは、非核武装地帯の設置、核実験の禁止という前提条件を設定し、そこで問題を解決しようとするところが、ソ連の見解と異なる。アメリカの言う軍縮は、このような軍備管理を含んでいるということを頭にとどめておく必要がある。

軍縮の概念とは何か？ 軍縮には核兵器の軍縮と通常兵器の軍縮がある。また完全軍縮と部分軍縮がある。今日、東西交渉の問題となっているのは、この核兵器の軍縮と通常兵器の軍縮を一本に合わせた全般的軍縮のことである。

それでは、軍縮の根本的目標は何か？ また、現在目標とされているところの全面的軍縮の根本目標は何か？ 即ち、世界の状態が次のようになる事である。どの国に於ても、軍備をなくし国内における治安維持のための警察権力を持ち、国際間の紛争を武力で解決しないのだ。今までのような武力解決でなく、国際法を世界全体に通ずる世界法とし、また、このような世界法を新に作り、それに伴い、世界法を守るために国際平和維持軍を確立しようというのだ。そしてまた、国際司法裁判所の審判に重要性と強要性を持たせよう。

このようなことの実現は可能であろうかという問題が出てくる。しかし、この実現が人間文明のために是非必要であるなら、やらねばならぬ問題だと思う。思うに、日本の明治維新の時を見てみると、当時は各藩が武力（軍備）を持ち競い合っていた。そして、トラブルを武力で解決しようとしていた。しかし、明治維新が確立し、各藩の軍備をなくし、その代りに警察力の設置によって日本をまとめあげた。このように近代的法治国家の確立により、各人は生命財産を守られるようになった。この例を見ても、これを世界にあてはめ、一本の世界的社会法に服従し、国際警察軍の設置、強化によって現代の問題が解決できないだろうか。また現在の原子力時代に於て、これらの努力なしに生きのびることは不可能だと思うのだ。

しかし、各国の首脳者の考え方は、戦争回避のために核兵器を持つのだとしている。即ち、相手国に対する心理的（脅威）効果を狙っているわけである。この考え方は正しだろうか？ 現在だと計画的戦争は起らないとしても、錯誤によって戦争が起る可能性がある。ベトナム紛争をみても、極地戦争だけでなく、だんだん大きくなり、ちょっとした錯誤によって大戦争になる可能性がある。

現在18か国軍縮委員会が行われているが、成果は上がっていない。しかし、軍縮提案も初期の頃とは大分違ってきている。今日では、米ソ間で完全全面軍縮提案を出し合い、それを条約案の形に持ってくるのだが、米の軍縮提案とソ連のそれとつき合せてぴったり行けば問題はないのである。が、今の段階では、趣旨だけは同じだが、部分的なことについて一致しないのである。しかし、従来の部分軍縮の考え方が去って、完全軍縮の方向に向っていることは確かである。

現在の軍縮には二つのテーマがある。

1. 両方の完全軍縮条約を検討して、一本にしぼろうという方向。
2. 非常監視所を相手国に設置して、各国で軍隊が結集したりする状態を事前に知り合う組織を持つという方向。これによって奇襲攻撃の不安がなくなり、国際緊張もなくなるだろうと考える。

アメリカは 1. の問題では今日国際紛争が絶えないので、一挙に完全軍縮に持って行こうとするのは無理であるとし、2. の方に主な狙いをおいている。

今年に於ける軍縮のテーマは次のようなものである。1964年に中共の核実験が行われたが、このような各国の核兵器保有拡散を防止しようとする動きが現われた。そのためには

1. 核兵器保有国は非所有国に核兵器を与えてはいけないし、非所有国は欲しがってはいけない。
2. 他の国ばかりに核実験禁止を要請し、自分の国では地下爆発の実験をやっていたのでは効果がない。(地下爆発の禁止)
3. 核兵器の生産や技術を進歩させないようにし、そのための条約をつくろう。
4. 大陸弾道弾を現在の質量に於て凍化しよう。

まず 1. の問題。アメリカは核兵器の使用を大統領の権限にだけ委譲しておけば拡散にはならない。北大西洋同盟に核兵器をやっても、米の大統領が発射する権限を持っているのだから拡散にならないとするところに、ソ連との意見のくい違いができるのである。

2. の問題点。地下実験の禁止というが、その証拠がはっきりと残らないところに問題がある。アメリカは、いくらこの条約を結んでも秘密にやられたのでは効果がない、相手国の現地視察の制度をつくろうと提案した。がソ連は拒んだ。ソ連は、アメリカ(同盟国)によって自己が包囲されている形なので、この劣勢を秘密性(核兵器に関する秘密)によってカバーしようとするのだ。

3. の問題点。原子兵器生産に於ける条約を結べば、当然原子炉の観測ということになり、相手に自己の秘密性を暴露する形になるのでソ連は反対した。

最後に、このような軍縮ということはなかなか難かしいが、これは一般的に見て何故だろうか。

第一に大国間に今まで述べたような敵対関係と不信感が存在する。

第二に、米ソの軍事戦略的要因に於て、利害関係に相違がある。

第三に、条約を結んだとしても、違反する、即ち、相手をだます技術が発達し、それが今日可能であるということ。

第四に、米の経済機構の問題である。アメリカの経済は、これら軍事的生産によって多くの利益を受けている会社が多いということで、ソ連のいうように一挙に完全軍縮にもっていくこと、即ち、軍事に関するもの全部を撤廃することができないのである。ここに於て、米ソの根本的見解の相違が現われる。ソ連は一挙全撤廃、アメリカは現在の国際状勢から見てもそれは不可能であり、できるものから解決し、step by step の方式で軍縮を解決していこうとする。この態度の相違である。

Ⅲ 調査と分析

平和についての調査

- 平和とはどういうことですか。君の考えをかきなさい。
- 次のような経験がありますか。あれば○、なければ×をつけ、○をつけた場合はその後の間に答えなさい。
 - 平和について討論したことがある。
 - 印象に残っているのは、どのような話題ですか。
 - その相手はどのような人ですか。(例えば、父、同級生など)
 - 平和に関する本を読んだことがある。
 - 書名と著者名を書きなさい。
 - 平和に関する講演を聞いたことがある。
 - 平和について、新聞の切抜きを作ったことがある。
- 次にあげた国の中で、平和であると思う国には○印を、平和でないと思う国には×印を、どちらかわからない国には△印をつけ、そのように判断した理由を()内に簡単に書きなさい。
 - 日本 ()
 - U. S. A. ()
 - ソ連 ()
 - フランス ()
 - 中華人民共和国 ()
 - ドイツ連邦共和国—西独 ()
 - ドイツ民主主義共和国—東独 ()
 - スイス ()
 - スウェーデン ()
 - スペイン ()
 - 南アフリカ共和国 ()
 - アルジェリア ()
 - コンゴ(旧ベ領) ()
 - アンゴラ ()
- イ. 現在の世界は平和であると思いますか。 a. 平和である。 b. 平和とはいえない。
(a. b. のどちらかに○印をつけなさい。)
ロ. その理由
- 現在の世界が平和になるために、必要なことはどんなことですか。
イ. 次に順位をつけて第3位まで選びなさい。()内に 1. 2. を記する。
 - () 軍備を撤廃する。 () 軍備を縮小する。
 - () 核兵器を世界に公開して、特定国に独占させない。
 - () 核兵器の全面的禁止 () 人種的偏見や人種差別を撤廃する。
 - () 国境を廃止して世界を一つのもの—世界連邦を樹立する。
 - () 大国が自重して慎重に行動する。 () 大国間の力を均衡させる。
 - () 一つの強大国を作って世界を委せる。
 - () 人々の心の中に平和を打ち立てるように教育する。
 - () 宗教のちがいによる争いをなくす。 () 宗教を広める。
 - () 世界を一つの体制—資本主義にする。
 - () 世界を一つの体制—社会主義にする。
 - () 植民地を独立させる。

- () 経済的に発展の遅れた国々を援助して国家間の貧富の差をなくす。
- () 世界警察を作って監視する。
- () 国連を強化して話し合いの場とする。
- ロ. その他の適切なことがあれば書きなさい。
6. 中国の核実験は世界平和にどのような影響があると思いますか。(a. b. c. のいづれかに○印をつけなさい。)
- a. 平和にとって脅威である。 b. 平和に役立つ。 c. 影響がない。
- そう判断した理由を書きなさい。
7. イ. 憲法第9条(戦争放棄)は改めるべきであると考えますか。
- a. 改めるべきである。 b. 改めなくてもよい。
- (a. b. いずれかに○印をつけなさい)
- ロ. その理由をかきなさい。

平和についての調査(その2)

1. 平和とはどういうことですか。その考え方で、前の調査の時と変わったところがあればそれを書きなさい。
2. 平和についての講義を受けた結果、次のa. b. c. に書いてあることを行いましたか。行えば○, 行わなければ×をつけ、○をつけた場合はその後の間に答えなさい。
- a. 平和について討論した。
- 印象に残っているのは、どのような話題ですか。
- その相手はどのような人ですか。(例えば、父、同級生など)
- b. 平和に関する本を読んだ。
- 書名と著者名を書きなさい。
- c. 平和について、新聞の切抜きを作った。
3. 次にあげた国の中で、平和であると思う国には○印を、平和でないと思う国には×印を、どちらかわからない国には△印をつけ、そのように判断した理由を()内に簡単に書きなさい。
- a. 日 本 (.....)
- b. U. S. A. (.....)
- c. ソ 連 (.....)
- d. フ ラ ン ス (.....)
- e. 中華人民共和国 (.....)
- f. ドイツ連邦共和国—西独 (.....)
- g. ドイツ民主主義共和国—東独 (.....)
- h. ス イ ス (.....)
- i. スウェーデン (.....)
- j. スペイン (.....)
- k. 南アフリカ共和国 (.....)
- l. アルジェリア (.....)
- m. コンゴ—(旧ベ領) (.....)

- n. アンゴラ ()
4. 現在の世界は平和だと思いますか。次の a. b. c. のどれか、あてはまるものに○をつけなさい。
- イ. a. 平和である。 b. 平和とはいえない。 c. どちらともいえない。
- ロ. その理由
5. 現在の世界が平和になるために、必要なことはどんなことですか。
- イ. 次に順位をつけて第3位まで選びなさい。()内に1, 2, 3を記す。
- () 軍備を撤廃する。() 軍備を縮小する。
 - () 核兵器を世界に公開して、特定国に独占させない。
 - () 核兵器の全面的禁止。() 人種的偏見や人種差別を撤廃する。
 - () 国境を廃止して世界を一つのもの—世界連邦を樹立する。
 - () 大国が自重して慎重に行動する。() 大国間の力を均衡させる。
 - () 一つの強大国を作って世界を委せる。
 - () 人々の心の中に平和を打ち立てるように教育する。
 - () 宗教のちがいによる争いをなくす。() 宗教を広める。
 - () 世界を一つの体制—資本主義にする。
 - () 世界を一つの体制—社会主義にする。
 - () 植民地を独立させる。
 - () 経済的に発展の遅れた国々を援助して国家間の貧富の差をなくす。
 - () 世界警察を作って監視する。() 国連を強化して話し合いの場とする。
- ロ. その他に適切なことがあれば書きなさい。

〔1. 平和とはどういうことですか〕

平和とはどういう状態を指すかの、その内容をひきだすのが、この問の意味である。

表 1. a. 平和とはどういう状態を指すか。

ブリテスト

項	目	実験学級	比較学級	合計
個人生活	1. 精神的安定, 幸福	20	11	31
	2. 愛情, 信頼, 理解, 尊重がある状態	7	4	11
	3. 対立, 争い, 憎しみが無いこと	4	7	11
	4. その他	6	8	14
社会生活	5. 国内安定 (政治的・経済的)	9	13	26
	6. 生活安定	16	17	11
	7. 自由平等, 人権尊重	8	17	6
	8. その他	5	13	10
国際関係	9. 戦争, 武力紛争のない状態	26	35	61
	10. 相互の理解, 尊重, 協調	11	6	17
	11. 人種, 国家間の差別圧迫, 干渉なし	6	13	19
	12. その他	10	7	17
13. その他		28	24	52
無 答		3	6	9

〔注〕 表中の数字は回答者一人一答とみず、調査回答者のあげている項目すべてを入れた。

この表に出た件数は全体で330件あり、一方回答者は175名（実験学級87名，比較学級88名）であったから，1人ほぼ2項目にわたって答えていることになる。全般的にみると，平和を国際関係においてとらえている者が最も多く，次に社会生活，個人のあり方におけるとらえ方という順になっている。

一つ一つの項目別にみると，「戦争，武力紛争のないこと」を平和と考える者が一番多く，61件ある。13のその他の項には「あらゆる争いのないこと」など三つの分類範疇のすべてを含むような回答が半分ほどあったから，両方をあわせてみると，回答者の半数の者が戦争の対立概念として，「平和」をとらえていることがわかる。この場合，生徒は残りの二つの大分類のどちらかをも，平和の状態と考えていることはもちろんである。次に目立つのが「生活の安定」であり，物質的に不安がなく安定した生活が保障されるような社会を平和だとしているわけである。

これと同様に多いのが「精神的安定，幸福」で，一人一人が幸福で心がおだやかである状態を，平和として想定している。その他とくに目立つものとしては，5と7を一緒にした「政治的混乱や社会問題がなく，経済的に繁栄している状態」というのがあった。

以上，三つの中で一番少ない「個人の生活における精神の安定」でも，全回答数の $\frac{1}{3}$ を占めており，平和のイメージは戦争の対立概念から，社会問題，身近かな個人の日常的な生活にひきつけてとらえているものまで多様である。

ポストテスト

〔1. 平和とはどういうことですか。前の調査のときと変わったところがあれば書きなさい。〕

ここでは，実験学級と比較学級に，教育実験後どのような変容があらわれたかを調べるのが眼目である。

表 2. b 平和とはどういう状態を指すか

ポストテスト

項 目	実験学級	比較学級	合 計
前 と 同 じ と い う 答 え	16	21	37
個人生活 { 精神的安定, 安らぎ	11	5	16
{ 信 頼	2	0	2
社会生活 { 国内安定	0	1	1
{ 生活安定	5	5	10
{ 自由・平等	1	3	4
国際関係 { 戦争, 武力的紛争, 及びその危険のない状態	18	13	31
{ 人種, 国家間の差別干渉なし	1	3	4
そ の 他	12	4	16
無 答	24	39	63

ポストテストでは，前と同じという答えが，両学級とも多く，37もあった。この場合，実際に前と同じであるものと，回答者の主観の中で同じであるものとの2つが考えられるが，それは回答者の個人的な追跡を行い，さらに2以下の具体性をもった問に対する答え

を調べてみなければ、実情を把握することはできない。

次に無答が、また増えている。したがって、回答件数が全体として著しく減っているわけであるが、この原因としては、根気のいる抽象的な問に再度接して気おくれがしたのではないかと考えられ、また教育実験で両学級とも平和の様々な考え方に触れたので、“平和とはこれだ”とはっきりいえなくなって、無答にまわったとも考えられる。

どのような特定の傾向だけが減ったのかという点になると、はっきりつかめないが、戦争などの国際関係でとらえる者、社会生活でとらえる者、個人的な安らぎとしてとらえる者すべてにわたって同様の減少傾向があるとみてよいだろう。

結局、平和のとらえ方は、両学級ともこの実験によって範囲が広まったと考えられるが、それらの個々の内容を全体としてまとめて把握するという段階にまで達せず、はっきり表現しえなかったとみてよいだろう。「平和」のとらえ方の変容もやはり、2の間以下の具体的な対象に関する答えの中で明確にされるであろう。

〔2. 平和についての関心〕

a. 生徒が平和について日常どの程度の関心を持っていたかを具体的な経験を手がかりとして調べ、本実験によってそれがどのように変容したかを追跡する。

b.

表 2. a. 平和についての関心

プリテスト

	実験学級	比較学級	計
a. 平和について討論したことがある。	19	29	48
b. 平和に関する本を読んだことがある。	5	13	18
c. 平和に関する講演を聞いたことがある。	4	6	10
d. 平和について、新聞の切抜きを作ったことがある。	3	9	12

表 2. b. 平和についての関心

ポストテスト

	実験学級	比較学級	計
a. 平和について討論した。	14	10	24
b. 平和に関する本を読んだ。	4	6	10
c. 平和について、新聞の切抜きを作った。	1	2	3

表 3. a. 討論の話題

プリテスト

局地戦について (インドシナ, コンゴ, ベトナム問題, キューバ危機, 民族解放闘争等)	8
平和運動, 真の平和等について	4
核兵器核実験について	4
日本の軍備, 自衛隊について	3
世界連邦, 国連について	2
戦争について	2
原子力潜水艦について	2
軍縮	2
その他, 米ソ対立, 憲法第9条, 国際問題, 世界情勢, 安保条約, 一民族による他民族の圧迫, 非同盟, 原水禁運動	

表 3. b. 討論の話題

ポストテスト

実験学級	ベトナム問題 3, 軍備のこと, 南北問題, マレーシア紛争の平和的解決, 神の存在の証明と平和について, ユネスコの実験教育がつまらなかった。結局平和などを深く考える必要はないだろう。
比較学級	軍縮問題 2, 米国の南ベトナムに対するあり方は是か非か, 中国核実験について, 国家間の貧富の差について, 平和とは何か, 自衛隊の地位,

表 4. a. 討論の相手

プリテスト

友人	35人 (同級生 23, 友人 9, 同学年生 1, 同クラブ生 1, 高校生 1)
家族	23人 (父 14, 母 2, 父母 2, 兄 2, おじ 1, おい 1, 家族 1)
その他	6人 (先輩 3, 先生 1, 神父 1, 従業員 1)

表 4. b. 討論の相手

ポストテスト

友人	13人 (同級生 8, 学校生徒 3, 友人 2)
家族	4人 (父 2, 兄 1, おじ 1)
その他	1人 (教会の牧師 1)

c.

1. a～dの各項の経験を持つ生徒は延88名、最低に見積っても生徒の $\frac{1}{3}$ は平和に関心を持って何らかの経験をしている。
2. 討論、読書が多いのは、それが生徒の生活に手近かなものであることから当然である。“切抜き”を作ったという経験は、平和についてかなり積極的な関心の結果といえよう。
3. 本実験によって、ポストテストに明かなように $\frac{1}{4}$ に近い生徒が僅かな期間に新たにa～cの経験をした。これは一応実験の成果と考えられるが、テーマの性質から予想していた反応より小さかった。
4. 話題についてプリテスト、ポストテストで大きな変容は見られないが、ポストテストでは実験学級の話題よりも比較学級のそれの方が、より具体的な内容をとりあげていることが注目される。
5. 討論の相手は同級生が多く、次に父親であり、この種の話の相手として家庭の母親、学校における教師が生徒の要求に十分にこたえていないのは残念である。

〔3. 平和な国、平和でない国〕

a. 生徒が平和について抱いているイメージを正確に把握することは困難である。平和を論ずる場合、それが現実の国々を照らし出して何らかの判断を下そうとすれば、そこに多様の契機を発見し、現状とはかけ離れた判断を下すこともあり得るし、現状についての理解の程度も影響するかも知れない。このような点を考慮し、次の14カ国の現状を平和という点から判断させ、平和の理解を確め、さらに、それが、本実験によってどのように変容したかをポストテストで調査した。14カ国を選択した際、われわれが手がかりとした点

をあげれば次の通りである。

- 日 本…自国, 平和憲法, 自衛隊, 米軍基地, 泰平ムード。
- U S A…繁栄する資本主義, 平和共存一部分核停条約, 海外基地, ベトナム介入。
- ソ 連…発展する社会主義, 平和共存一部分核停条約, 中ソ論争。
- フランス…抬頭するヨーロッパの中心 (E E C), アルジェリアの停戦。
- 中 国…自力更生めざす7億の人民, 平和5原則, 部分核停反対, 核廃棄, 台湾海峡。
- 西 独…東西分裂, 驚異的な復興と海外進出, ナチ復活の噂。
- 東 独…東西分裂, ベルリンの壁。
- スイス…永世中立国。
- スウェーデン…ふみにじられた中立国, 社会保障。
- スペイン…フランコ独裁, 欧州の南の国, 工業化の努力。
- 南ア連邦…アパルトヘイトと Black Africa の憎しみ。
- アルジェリア…対仏停戦と社会主義的な国内開発, Nationalism。
- コンゴ…消えぬ内戦の火, 中央集権と部族争議, 豊富な資源と外国資本。
- アンゴラ…独立運動, 強制労働。

b. 表 5

c.

1. プリテストで平和であるとの判断が圧倒的に多い国は, スイス, スウェーデンである。ついで日本, フランス, ソ連の各国は平和であると思う者が多く, 反対にコンゴ, 南ア, アンゴラ, アルジェリア, 東西独は平和でないと判断したものが圧倒的に多い。アンゴラ, アルジェリアについては, スペインとともにわからないとする者が多く, U S A, 中国は平和であるとするものより, 平和でないとする者が若干上回っている。

2. 生徒が日常に抱いている平和な国というイメージは, 個々人の思考は別として数量的に握れば, 資本主義国にも社会主義国にも具体的な姿としてあり, 平和でない国というイメージが強烈な国は, 植民地, 旧植民地, 冷戦の結果民族が二分された国に多いことは注目しなければならない。

3. ポストテストの結果によれば, 全体として平和であるという判断が減少した。とくに日本, スイス, スペインは実験学級, 比較学級とも, 平和であるとする判断が減り, 平和でないとする判断が増加した。

実験学級では, ソ連, 中国, 西独, 東独, スウェーデンの諸国は平和であるとする判断が減り, 平和でないとする判断の増加が目立つ。

比較学級においては, U S A を平和でないと判断する者が増加し, ソ連, 仏, 東独, アルジェリアを平和と判断する者の増加が指摘できる。

4. 全体として平和であるという判断が減少したのは, 本実験によって平和についての理解が進むにつれ, それを現実の諸国家に照応させることの難しさから, 当然のことと考えられる。日本, スイス, あるいは, 実験学級におけるスウェーデンについての判断の変化は, 統計的な数値を逆転させるような大きなものではないが, 平和憲法, 中立, 社会保障という外面的なものの評価から, 一層判断の基準が厳しくなった結果とも考えられる。実験後の実験学級と比較学級の大きな差は, U S A, ソ連, 仏, 東独, アルジェリアの判断で, 現実強く結びついた平和の契機をより多く発見したもののようである。

表 5 平和な国 平和でない国

	ブ				リ				テ				ス				ト							
	○		×		△		その他		○		×		△		その他		○		×		△		その他	
	実験学級	比較学級	実験学級	比較学級	実験学級	比較学級	実験学級	比較学級	実験学級	比較学級	実験学級	比較学級	実験学級	比較学級										
日本	48	48	23	23	10	14	6	3	(-7)	41	(-7)	(+3)	26	(+1)	24	(+1)	15	(+1)	10	(+1)	15	(+1)	6	(+5)
U. S. A.	32	32	37	35	13	17	5	4	(-2)	30	(-6)	(-1)	36	(-3)	41	(-1)	14	(-3)	12	(-1)	14	(-3)	5	(+3)
ソ連	41	24	18	30	20	28	8	6	(-6)	35	(+8)	(+2)	20	(-4)	25	(-5)	24	(-4)	23	(+3)	24	(-4)	5	(-3)
フランス	38	33	15	23	25	28	9	4	(+3)	41	(+7)	(+3)	20	(-8)	20	(-3)	20	(-8)	19	(-6)	20	(-4)	5	(+4)
中国	34	24	29	35	17	22	7	7	(+4)	41	(+4)	(-4)	18	(+5)	20	(+5)	(+1)	(+1)	19	(+5)	(+1)	(+2)	5	(+4)
西独	23	19	40	52	18	14	6	3	(-8)	27	(-2)	(+2)	25	(-3)	30	(-3)	15	(+1)	22	(+1)	23	(+1)	9	(+4)
東独	10	6	51	67	20	11	6	4	(-5)	15	(+2)	(+1)	42	(-8)	49	(-8)	19	(+3)	19	(+2)	15	(+1)	7	(+3)
スイス	63	63	5	10	13	11	6	4	(-6)	5	(-6)	(+4)	50	(-3)	59	(-3)	8	(+1)	22	(+1)	14	(+3)	6	(+3)
スウェーデン	60	57	4	8	16	18	7	5	(-9)	51	(+2)	(+6)	10	(+6)	11	(+3)	57	(+2)	18	(+2)	10	(+8)	3	(+3)
スペイン	24	20	16	24	37	38	10	6	(-3)	51	(-3)	(+6)	10	(+2)	11	(+2)	51	(-2)	18	(-2)	10	(-5)	4	(+1)
南ア連邦	3	1	60	65	19	17	5	5	(+7)	17	(+7)	(-6)	22	(-2)	26	(-2)	21	(-4)	35	(+2)	38	(-4)	5	(+3)
アルジェリア	12	4	29	38	38	41	8	5	(+2)	8	(+2)	(-5)	54	(-7)	63	(-7)	7	(+2)	21	(+6)	13	(+2)	5	(-3)
コンゴ(旧ベ領)	2	0	65	73	14	10	6	5	(+3)	6	(+3)	(-17)	24	(-6)	31	(-6)	7	(+9)	44	(+9)	43	(+4)	8	(+2)
アンゴラ	5	1	23	23	52	57	7	7	(+1)	6	(+1)	(-5)	18	(+2)	25	(+2)	2	(-4)	23	(+9)	14	(-4)	7	(+1)

○…平和である

×…平和でない

△…わからない, どちらともいえない

その他…無答, その他

〔4. 現在の世界は平和だと思いますか〕

ここでは、平和の理解について世界の現状という、より具体的な社会事象を対象として、それが平和といえるかどうかをききだすことが目的である。

表 6 現在の世界は平和であるか

プリテスト

項 目	実験学級	比較学級	合 計
平和である	12	9	21
平和とはいえない	73	75	148
そ の 他	2	4	6
合 計	87	88	175

世界の現状は「平和とはいえない」とする者が大部分である。しかし「平和である」と考えているものも、全体の一割はいる。「平和とはいえない」とした理由をみると、

表 7 平和とはいえないとした理由

項 目	実験学級	比較学級	合 計
個人間、個人内の問題	1	2	3
内乱、動乱、政情不安	2	1	3
生活の不安定、貧困	4	1	5
局地戦などの戦いがある	27	24	51
軍備があり、拡大している	4	9	13
戦争のおそれあり	8	11	19
東西・両体制の対立	18	24	42
各国の紛争、対立、冷戦	10	12	22
人種差別、内政干渉がある	11	7	18
南北間の争い、問題	4	7	11
そ の 他	26	21	47

局地戦などの現実の戦争を指したものが、もっとも多く、次いで「東西両体制の対立」が考えられている。この2項目だけで、全部の半数（その他を除いて）を占めているが、国際関係、社会生活、個人生活という形にまとめてとらえてみると、東西両体制の対立とそれに関連した局地戦争などの国際関係をもって「平和とはいえない」と考えているものが圧倒的に多い。「その他」の項目が47（全体の約1/4）あるが、その中では「平和でない国がある」（9件）、「植民地の存在」「一つの民族が2分されて苦しんでいる」「経済的平等が確立されていない」など、各国の政治、経済に視点をすえているものが多かった。しかし、全体の中では、各国における社会生活やとりわけ、個人生活の観点からのとらえ方はきわめて少なかった。世界の現状の全体という大きな対象に対する問いであるから、けだし、当然であろう。

その他「独裁がある」といったものや、変ったものとしては「平和という問題が問題にされている」などがあった。

「平和である」とした理由には、「局地戦、国境紛争など一部には問題があるが、大局的には平和である」というのが殆んどで、その他、自分の身のまわりをみれば「平和であ

る」とか「人間の世界には少々争いはつきものだ」というのも少数あった。

局地戦があっても、世界が平和であるというのは、そうした社会事象を全く個別的にとらえていて、他の事象や全体との関連づけがきわめて薄弱な思考法といえるだろう。それはまた、たとえとなりの国で人が殺しあっても、自分のところは当面なんでもないといい、人間の苦悩に無関心な傍観者の態度といえよう。

ポストテスト

世界の現状が平和かどうかということに関する考え方が、実験学級と比較学級とで、どのように変わっているかをみるのが目的であるが、殆んどの方が「世界は平和とはいえない」と考えている大勢に変化はない。

表 8 現在の世界は平和であるか

ポストテスト

項	目	実験学級	比較学級	合 計
平和である		4	3	7
平和とはいえない		27	61	118
どちらともいえない		20	22	42
その他		2	2	4
合	計	83	88	171

この表の数字を、プリテストのそれとくらべてみると世界は「平和である」とするものが、7にまで減り（減少数14）、「平和とはいえない」とするのをもまた減っている。

「平和である」が減ったのは、両学級とも同様、世界の現状に対する危機感を訴えられたことが原因であることにまちがいはなかろう。「平和とはいえない」というのが激減しているのは、プリテストの時なかった「どちらともいえない」という項目にそれが流れたためと考えられる。つまり、プリテストの時は「平和であるとはいきれないし、平和でないとも断言できない」と考えたものは「平和とはいえない」の方に回答したはずであるが、「どちらともいえない」がポストテストで多くなっているのは、そのあいまいな立場の方が相当数（数字ははっきりつかめないが）あったことを示しているわけである。したがって「平和ではない」と「どちらともいえない」の変化はわからないし、どちらともいえないの内容を、両学級くらべても、「部分的には戦争もあるが、全体としては平和といえる」「大戦はないが核兵器の恐怖がある」「均衡の上になりたつあやしげな平和」といったものが同様にみられ、結局、3の各国別にみた、より具体的な対象の場合の方に説明を委ねなければならなかった。また、実験学級と比較学級における変容もここでははっきりとらえることはできなかった。

〔5. 現在の世界が平和になるためには、どんなことが必要か。〕

a. ここでは、平和達成の手段、方法を、生徒がどう考えているか——それを引き出すことが目的である。まず、プリテストの分析からはじめよう。

b. 表 9. a

c. 日本の平和憲法がゆきわたっているためであろうか、「武装を解くこと」によって平和を実現させようとする期待が一番多い。軍備の撤廃82、軍備の縮少24、核兵器

表 9. a. 現在の世界が平和になるためにはどんなことが必要か

プリテスト

	1 位			2 位			3 位		
	実験学級	比較学級	計	実験学級	比較学級	計	実験学級	比較学級	計
1. 軍備撤廃	10	26	36	18	13	31	11	5	15
2. 軍備縮少	3	1	4	4	7	11	3	6	9
3. 核兵器を世界に公開して特定国に独占させない				1	1	2	1		1
4. 核兵器の全面的禁止	11	15	26	9	9	18	6	3	9
5. 人種的偏見や人種差別を撤廃する	6	3	9	5	10	15	11	16	27
6. 国境を廃止して世界を一つのもの—世界連邦樹立	9	8	17	3	8	11	9	10	19
7. 大国が自重して慎重に行動する	2	6	8	2		2	6	9	12
8. 大国間の力を均衡させる		1	1	2	1	3	2		2
9. 一つの強大国を作って世界を委せる									
10. 人々の心の中に平和を打ちたてるように教育する	18	15		9	5	14	6	12	18
11. 宗教のちがいによる争いをなくす				2		2	1	1	2
12. 宗教を広める	2		2				2		2
13. 世界を一つの体制—資本主義にする				1		1			
14. 世界を一つの体制—社会主義にする	3	1	4	1	1	2	2		2
15. 植民地を独立させる	0	1	1		3	3	2	2	4
16. 経済的に発展の遅れた国々を援助して国家間の貧富の差をなくす	5	3	8	8	12	20	15	12	27
17. 世界警察を作って監視する				1		1			
18. 国連を強化して話しあいの場とする	16	11	27	25	18	43	11	17	28
合 計	85	91	143	91	88	179	88	89	177

の生産、貯蔵、使用などに対する全面的禁止⁵³などにそれがみられる。軍備の撤廃でなく縮少が必要だとしたものは、撤廃や全面的禁止の実現が当面きわめて困難であるとの認識によるものと思われる。この武装解除、武器の除去ということは、1, 2, 3位のうち、とくに1, 2位に多く集中していることから、生徒はその必要度を高く認めていることがわかる。

次に多かったのは、国連に対する期待である。国家間の紛争を解決する場として、しかも話し合いによる解決の場として、国連の力を強めることが必要だとみている。

その他に顕著な傾向としては、「人々の心の中に平和を打ちたてる」ことによって紛争をなくそうとする態度があり、それを教育に期待しているものが多い。

必要度は第2次的になるが、「人種差別をなくす」「後進国の援助によって国家間の貧富の差をなくす」（これらは3位に集中している）ことが平和の達成に大切だという考え方も多くみられる。これは単に武力的紛争だけでなく、人種差別や貧富の差もまた平和に反するものと考えている生徒の気持のあらわれであろう。

「国境を廃して世界連邦をつくる」というのもかなり多かった。これは、国家という枠をはずすことによってその対立をなくしたいという考え方であるが、現実の世界の対立の根深かさをかなり容易に、甘くみすぎている傾向を感じさせる。

「一つの強大国をつくって世界を委せる」という考えのものはひとりもいなかった。やはり独裁の危険を感じるのであろう。宗教に対する期待は殆んどない。アメリカ流の、世界を全部資本主義体制にすることが平和の条件だという発想法は、支持者が一人だけであった。その他の項にあらわれた顕著な傾向としては「世界各国の相互の理解」の必要性を考慮するものが最も多かった。

表 9. b. 現在の世界が平和になるためにはどのようなことが必要か

ポストテスト

	1 位			2 位			3 位		
	実験学級	比較学級	計	実験学級	比較学級	計	実験学級	比較学級	計
1. 軍備撤廃	10	(-1) 15	25	18	(+1) 18	36	(-2) 9	(+7) 11	20
2. 軍備縮小	(-3)	(+1) 2	2	(-2) 2	7	9	(+3) 6	(-1) 5	11
3. 核兵器を世界に公開して特定国に独占させない				(-1)	(+1) 2	2	1		1
4. 核兵器の全面的禁止	11	(-6) 9	20	(-5) 4	(+1) 10	14	(-2) 4	(+2) 5	9
5. 人種的偏見や人種差別を撤廃する	(-4) 2	(-2) 1	3	(+7) 12	(+1) 11	23	(+1) 12	(-19) 6	18
6. 国境を廃止して世界を1つのもの—世界連邦を樹立	(+1) 10	(+1) 9	19	(+5) 8	(-4) 4	12	(+1) 10	(-4) 6	16
7. 大国が自重して慎重に行動する	(-1) 1	(-3) 3	4	(-2)	(+2) 2	2	(-3) 3	(-2) 4	7
8. 大国間の力を均衡させる		(-1)		(-1) 1	1	2	(-1) 1	(+2) 2	3
9. 1つの強大国を作って世界を委せる									
10. 人々の心の中に平和を打ちたてるように教育する	(+9) 27	(+2) 17	44	(-2) 7	(+2) 7	14	(+6) 12	(-2) 10	22
11. 宗教のちがいによる争いをなくす				(-1) 1		1	(-1)	1	1
12. 宗教を広める	(-2)	(+1) 1	1	(+3) 3		3	(-1) 1		1
13. 世界を一つの体制—資本主義にする				(+1) 2		2			
14. 世界を一つの体制—社会主義にする	(-1) 2	(+5) 6	8	(+1) 2	1	3	(-2)	(+2) 2	2
15. 植民地を独立させる	(+1) 1	(+1) 2	3		3	3	(-1) 1	(+1) 3	4
16. 経済的に発展の遅れた国々を援助して国家間の貧富の差をなくす	(-3) 2	3	5	(+2) 10	(-8) 4	14	(-12) 3	(+2) 14	17
17. 世界警察を作って監視する				(-1)				(+1) 1	1
18. 国連を強化して話しあいの場とする	(-2) 14	(+5) 14	28	(-15) 10	(-6) 12	22	(+3) 14	(-8) 9	23
合計	80	82		80	82		77	79	

()内の数字は、プリテストと較べての増減を示す。

ポストテストでは、全体の解答数が、実験学級では27件、比較学級23件と減っている。この原因は欠席者（実験学級4人、比較学級0）がいたこと、ユネスコ実験教育に対する批判的態度から、実験学級で反応を拒絶したもの、比較学級で知った複雑な紛争問題にどう対処してよいかわからなくなったもの、無関心のために返答しなかったと思われるものがいたからであろう。

全体として、プリテストのとき多かった項目が、多く、少なかった項目が、少い、という傾向にかわりはない。

実験学級では「心の中に平和を打ちたてる」が13件（低くみても、全体の1/7が変更した）と大きく増え、ユネスコ精神による教育の成果がみられる。世界連邦への期待も7件増え、理想への傾斜が深まったことを示している。人種差別をなくす必要性も、わずかながら増した。

意外にも減少したのが「国連強化」への期待で、14件もあった。これは両学級に対して行った国連の動きを知らせる講演で、国連が紛争解決のための重要な場として、世界の国々の期待を担っていることを知ると同時に、一方では、両体制の複雑にからまってあらわれる対立を映す鏡でしかなく、したがって紛争解決の場としては十分信頼できない、という感じを生徒が強く持ったためではないかと考えられる。「後進国援助」も極端に減り(13件)「核兵器の禁止」への期待も減っている(7件)。これは、現実には平和達成のために行なわれている、さまざまな施策よりも、それらを超越した精神的な心構えによってこそ平和が獲得できるのだという考え方に移行したことを示すものといえよう。平和的精神なくして平和が達成されないのはいうまでもないが、ただ上記のような態度は一面、現実的な平和への努力をないがしろにする危険を持ち、また心的態度の如何にかかわらず、人々が紛争にまきこまれていった歴史的事実にたいする認識の薄弱さを示すものと考えられ注意を要する。

比較学級では、「人種差別」が11件減っている。この項目は、プリテストでは3位に多く集中していたのだから、その原因としては、平和達成のためにもっと重要なことがあるとの認識をもったためとみられる。それは何だろうか？「国連強化」への期待はこの学級でも相当(9件)減っている。この場合も実験学級と同様、国連そのものもつ問題性によって期待減になったとみられるのである。が、しかし、1位の件数だけをみるとこの項目は5件も増えている。結局、現在のように弱体でなくともっと期待しうる国連にしようという態度になって、重点移動しているようである。その他には、「世界を一つの体制、社会主義にする」方法や、ベトナム問題などを反映してか「植民地の独立」への期待に移っている。

「世界連邦」の夢がはかなく消え去った(7件減)のは、比較学級における学習において、根深い対立や紛争解消のための、さまざまな努力を知らされたためといえよう。「後進国援助」が減っているのは、その援助の実体が常に後進国の利益のために行われているとは限らないという現実の認識を、あらためてもらった生徒がいるからであろう。「核兵器の禁止」もわずかながら減っている」これも困難な軍縮交渉の歴史に触れて、今までの安易な期待が破られて、とまどっていることを示すものと考えられる。

なお、「武器の除去」「心の中に平和を」という達成方法は、殆んど増減なく、ともに多かった。

以上、実験学級、比較学級ともにその一連の学習によって平和達成の考え方に決定的といえる変容はなかったが、やはりそれぞれの系列の講義内容によって、かなりの影響があったことが認められる。実験学級では、平和達成への諸々の困難な努力を軽視して、かなり安易に、心的態度だけに頼ろうとする傾向が増えたと考えられる。比較学級では、国際情勢の複雑な動きを知らされて、いささかたじろいでいる感じがあり、どうしたら真の平和が達成されるのか迷いつつも追求している様子がうかがえる。

〔6. 中国の核実験について〕

a. 1964年10月、ついに中国が原爆実験を行った。これにより世界に核保有国が一つふえたことになり、東西の力の均衡によって支えられて来た平和的状态に、重大な影響を及ぼすであろうと各新聞が報じた。かかる世界情勢にかんがみて、生徒が平和問題を考えて行くのに先立って、この事件をいかに考えているかを調査し（プリテスト）更に平和に関するの諸々の知識を持たせた段階で再びこの問題を考えさせ（ポストテスト）生徒の考え方の上でいかなる相違が見られるかを調査したものである。

b.

1. 中国の核実験は世界平和にどのような影響があると思いますか。

表 10. 中国の核実験は平和にどのような影響があるか

	プ リ テ ス ト			ポ ス ト テ ス ト		
	実験学級	比較学級	計	実験学級	比較学級	計
a. 平和にとって脅威である	53	64	117	56	55	111
b. 平和に役立つ	9	4	13	7	5	12
c. 影響がない	16	12	28	14	14	28
d. その他	9	8	17	6	14	20

ロ. そう判断した理由

1. 平和にとって脅威であると判断した理由

(1) 「核兵器、核そのものが危険なものであり、その増えることは、とにかく人類にとって脅威であり、戦争の危険がある」

プリテスト 38名

ポストテスト 53名

(2) 他の国へ与える影響により対立が多くなる。

プリテスト 23名

ポストテスト 18名

(3) 中国自身に対する不安、不信、脅威

プリテスト 14名

(実験学級、比較学級ほぼ同数)

ポストテスト 10名

(実験学級9名、比較学級1名)

(4) 軍備縮小への動きを見せはじめた世界の動きに逆行するものである。

プリテスト 10名

ポストテスト 12名

(5) その他, プリテストの結果として

「力の均衡がくずれる」7名

「目的はどうであろうと, 結局は中国の国家意識の現れに過ぎない」

「米ソの平和共存への挑戦, 脅迫である」

「勝手に一つの国だけ強大な武力を持つことになるかも知れない」

ポストテストに現われたその他の理由

「力の均衡がくずれる」

「国連に未加盟なので抑える機関がない」

「中共が核兵器禁止を提唱しても信用できない」

2. 平和に役立つと考えた理由

(プリテスト)

「核兵器独占による核保有国の侵略の危険が, 核保有国の数が増すことにより少なくなる」7名

「本質的には核実験は良いものではないが, 現在のアメリカの行動を阻止し, 植民地解放を達成する上で有効であり, これを平和にとって脅威というのは, アメリカの側から見た言葉である」

「核実験をすると, 人々は核実験の危険を強く印象づけられ, それが戦争をしてはならないという思想に通じて, 人々には反戦思想を持たせることができる」

「アメリカ, ソ連の間にはさまれたアジアに中共が一勢力圏を作ることになるので, アメリカも, より事を慎重に行うようになる」

(ポストテスト)

(実験学級)

「核兵器の独占を防ぐ」

「大国の行動が慎重になる」

「大国がアジアから手を引くようになる」

「現状を変化させる」

(比較学級)

「中国も核報復力を持つことになるので, 戦争を起しにくくなる」

「世界の力の均衡に役立つ」

「この実験が軍縮会談への大きなステップとなる」

「中共の軍事力がアメリカに匹敵するようになって, アメリカが東南アジア, 及び中国に侵略ができなくなった」

「帝国主義勢力に大きな打撃となる」

3. 影響なしと考えた理由

(プリテスト)

「世界の中の一つの国である中国が核実験を行ったからと言って, 世界的規模から見れば大したことではない」

「核実験が直ちに核戦力に結びつくわけではない」

「核実験が直接世界の平和を左右するとは考えられない」

「中共のような大国が核兵器を持つのは当然」

「どの国も自衛手段はある程度必要である。中共にとって、資本主義国、更にソ連の核保持は脅威であり、中共の核実験は自衛上当然」

(ポストテスト)

「他に核保有国が存在するから、中共が核兵器を持っても、平和的均衡は保たれる」7名

「核兵器を実際に戦争に使用するとは考えられない」5名

「単に国力を世界に示す為のものである」3名

「中国が軽率な行動をとるとは考えられない」3名

4. その他

(プリテスト)

「平和にとって役立つ面もあるし害になる面もある」5名

「現状ではどうも言えない。各国の受け取り方、出方次第」8名

「何らかの影響はあるが、どういうものかは不明」

(ポストテスト)

無答8名(実験学級1名, 比較学級7名)

「平和に役立つ面もあるし害になる面もある」3名

「各国の出方次第」2名

「現段階では回答不能」(時期尚早, 資料不足)4名

c.

1. プリテストとポストテストの結果は大した差がない。(第1表)
2. しかし、ポストテストでは、「平和にとって脅威である」とした人数がプリテストの時と比較して6名の減少を示し、実験学級では増加し、比較学級では減少したのは、本教育実験が生徒をして、より事態を深く考えさせる事に役立ったと思われる。即ち、実験学級では、心の面の平和を中心に指導したが、生徒の平和追求の気持ちが強まり、それが核実験を、平和を脅かすものであるとの考えを強めさせたに違いない。また比較学級では、現実を現実として生徒に提示し、生徒は、より深く現実を知るようになった。ここから、当初の核実験即平和破壊という直線的な考え方から、現実の認識の上に立った判断ができるようになった事を示してはいないだろうか。
3. 中国の核実験が平和にとって脅威であるのは中国そのものに対する不安があるからだとした者が、比較学級に於て著しく減少しているのは、本教育実験によって与えられた現状に対する知識が考え方の上に影響したものであろう。
4. 核そのものの持つ破壊力の大きさを本教育実験を通じて充分認識したと思われる。
5. 「平和に役立つ」「影響なし」とした者の人数がプリテスト、ポストテストを通じ同数に近いのは、極く一部の生徒であるが、一つの考えを自分なりに持っている様であり、万事に自分なりの見解を持つ態度は良いことであるが、思想的公平さを欠かないよう指導する必要もあろう。

〔7. 憲法第9条について〕

- a. 日本国憲法第9条「戦争放棄」の条項が、近年、憲法調査会で取り上げられて、改

正をめぐって議論が白熱しているが、国内世論も、独立国として自衛力を持つのは当然だとか、第2次大戦の教訓を生かし、世界に平和を宣言した我が国は、世界平和の理想を実現する為には絶対武装すべきでないとする意見が、対立し合っている。ここで平和の問題を考えるに当り、この憲法第9条についての認識と考え方を調査し比較検討してみるのがこの間の目的である。

b. イ、憲法第9条は改めるべきか

表 11. 憲法第9条は改めるべきか

	プ リ テ ス ト			ポ ス ト テ ス ト		
	実験学級	比較学級	計	実験学級	比較学級	計
改めるべきである	15	15	30	17	13	30
改めるべきでない	67	68	135	61	67	128
その他	5	5	10	5	8	13

ロ、その理由

1. 「改めるべきである」とする理由

(プリテスト、ポストテストで理由はほとんど同じ)

「今の世界では軍備を持たなくては他国と対等にやって行けない」8名

「自衛の為には軍隊を持つことも止むをえまい」5名

「国連軍に加わる為に必要」3名

「あいまいな条文をはっきりさせるため」4名

「他の解釈ができないようにし、徹底的に戦略行為を全廃するため」3名

2. 「改めるべきではない」とする理由

「戦争をしたくない。するべきでない。戦争放棄こそ世界平和への最短経路で、日本がそれをまっ先に憲法にとり上げたのは誇りであり、進めていくべきものである」という主旨が大部分を占めている。

「現在日本が軍備を持ったところで、核戦争の時代においては、持たないことと大して変わりなし」10名

「ここで軍備を許すことになれば、中共がだまっていない」

「災害援助、漁民保護の為には自衛隊はあってもよい」

「軍備の為に費用が国民生活に及ぼす影響大」

c.

1. 改めるべきだとする者の中に、7名は、字句の解釈次第で自衛隊を生み出している原条文の不備を改め、厳格に戦争放棄を規定し、平和憲法を守って行くことと主張しているが、この主旨はむしろ、「改めるべきでない」側に立つものである。

2. 国連警察軍へ派遣する為に軍隊の必要があると考えている者も、根本は、日本独自の戦力を持つということとは相反する考え方に立つものである。

3. 従って、我が国に軍備を持つことを認める者は13名で、「改めるべき」だとする総人数の半数以下である。

4. プリテスト、ポストテストのいずれも、数値や理由の面で、ほとんど差が見られなか

ったのは、この憲法改正問題が、かなり長期に亘って議論のまとなってきたので、すでに生徒が各自、各々の見解を持っていたからである。

5. 生徒自身は直接戦争を体験していないが、戦争の惨めさをよく認識しているのか、大部分が「改正反対」「再軍備反対」を唱えている。

〔調査のまとめ〕

本校の生徒は日常において平和にかなりの関心を持っていたが、本実験を通して新に、積極的な関心をもつ者が増加したことは実験の最初の成果である。

生徒の実験前における平和についての理解は、全体として常識的乃至、図式的であり、多くの問題を断定的に解釈する傾向があった。実験後においては、全体としてやや懐疑的な反応が目立つが、これは学習の結果安易な断定を避けるようになったことによると考えられる。

平和をどういう状態と考えるか——この間にたいしては、実験前後ともに武力紛争や不安のない生活状態を想定しているが、実験学級では実験後も、現実的な対立関係を未分化なままで捉える傾向や、局地戦はあっても全体としては平和であるといった、諸事象の関連づけをしない捉え方が殆んど変化していない。比較学級では、平和でない状態の捉え方の分析は、相互関連的傾向への変容がわずかにうかがえる。

平和の理解を〈この国は平和かどうか〉という問いで調べてみると、実験前には、一方で両体制の対立を平和でない状態だと答えておきながら、他方で、資本主義諸国と社会主義諸国とがともに平和な国であると答えるような矛盾が多くの生徒に目立った。実験後、この矛盾を、実験学級においては、社会主義国が戦争の契機になっているという考え方で解決し、比較学級では〈わからなくなった〉とか、資本主義国の方が契機になっているらしいという考え方に変わっている。さらに、どちらの学級でも同程度に平和とされる国がきわめて多数減少している。

平和を達成するための方法をみると、武装解除、国連の強化、心の中に平和精神を確立することなどが平和の条件だと考えられていたが、かなりの変容をみせ、実験学級では、平和精神の確立に重味のある期待を寄せるものが多くなった。しかし一方では、この態度が現実的な平和への努力を軽視した観念の世界に逃げ込んでしまう態度とうらはらに同居してしまう傾向をみせている。比較学級では現実の複雑な国際情勢と平和達成の困難さに重圧を感じながらも、それから逃避しようとする傾向は殆んどみられず、かえって現実的に平和を獲得するにはどうしたらよいか——それを、現実の社会事象の連関をたぐりながら、追求していこうとする意欲をみせている。

Ⅳ ま と め と 反 省

われわれは、生徒にユネスコ精神の最高価値をあらわす「平和」について考えさせ、又具体的に国際社会の問題を考えさせることによって、国際理解教育の有効な見を見出したと考えて、本実験を行なってきた。

先ず、教育実験の目標としてあげた次の諸点について、昨年の予備実験の経験を活かし、われわれは概ね、その目標を達成することができたのではないかと考える。第一に指導計画の充実と比較実験の徹底をなし得たということである。第二に多くの専門家のお力添えを得たことにより、指導内容の充実をなし得た。第三にプリテスト、ポストテストを通して、内容を厳密に検討し、評価においては、両群の比較検討にかなりの徹底を期し得たと考える。

本実験の生徒に与えた学習効果の最大のもは、平和についての関心を深め、常識的な理解を学習計画に従って、高度の理論的な理解へと導いたことであると考え。彼らの理解・態度形成における両群の顕著な相異を比較すれば次の通りである。実験学級では、本実験を通して心的態彼が深まったが、一部に現実軽視の傾向がみられたのに対し、比較学級では、現実の困難さから懐疑的になりつつも、平和を困難な現実即して考えようとする、積極的な意欲がうかがえた。平和な世界の実現が、結局は後者のこのような積極性に期待される他ないとすれば、平和の教育における、ひいては国際理解教育の有効な道、進むべき方向がそこに暗示されているといえるのではなからうか。

われわれは、本実験の反省として、次の諸点をあげなければならない。第一は平常の学校教育体制の中で、かなり大規模な教育実験を行なうことに伴う諸種の困難である。第二は、生徒の平常の理解が多くの個人的な関心によるものであって、いわゆる基礎知識の個人差が大きく、それが実験を困難なものにした。第三に、本実験におけるわれわれの力点は、最近の協同学校計画の基本方向に則り、厳密な特定実験というよりむしろ、普及活動ということにあったが、生徒の一部に実験そのものに非協力、乃至は反抗が現われたことである。その理由として考えられることは、本校生徒の意識水準が高く、特にテーマに強い関心をもつ生徒は、かようなテーマがユネスコ教育実験の名のもとに行われるということに不信を懐いたようである。それは、わが国の極端に分裂した政治的條件の投影であり、避けがたい困難であるのかも知れない。しかし、われわれがその困難を予測して、周到な計画に基いたオリエンテーションを行い、H・R 担任の積極的な協力によって指導が慎重に進められれば、かなり軽減された問題であったかとも考えている。

今日の日本では、平和は余りにも普遍的な価値とされ、とかく常識的な理解に委ねられているのではなからうか。現行教育課程の中でも、形式上はとも角、実質的には等閑に付されているきらいがある。また、教師も、多くの困難を予測して現実的な角度からこのテーマで生徒と話し合う機会が少ないようである。しかし、本実験で明らかのように、生徒達の常識的な理解は、とかく皮相的で、矛盾に充ちている。仮に問題の難かしさから、実際的な問題に若干懐疑的になるという危険はあるにしても、今日のように平和が重要な時代に、われわれはそれを回避することはできない。したがって、現実の世界の動きに結び

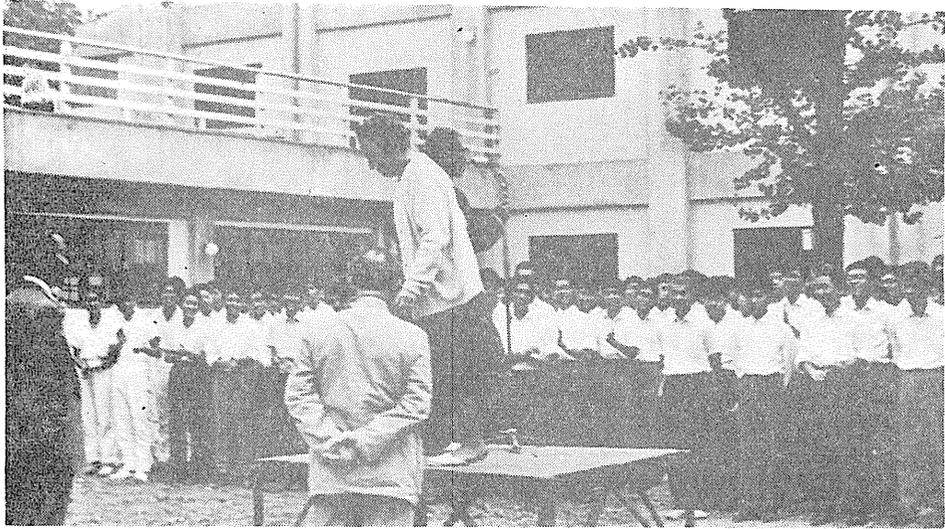
ついた角度から、教育課程の中に「平和の研究」を組み入れることは肝要である。それが国際人としての未来をもつ、若い世代に対する今日の教育の責任でもある。

最後に、今回の実験について、御援助を戴いた関係各方面、とくに国内委員会の彦坂課長はじめ、貴重な時間をお割き下さった講師の先生方に厚く御礼申し上げたい。

(東京教育大学付属駒場高等学校ユネスコ校内委員，明石・中野・大西・岡本・林)

A STUDY ON PEACE

—With a View to Promoting a Better International
Understanding of High-School Students—



Mrs Hanna Rozental visited our school in September, 1964



A special lecture
on UNESCO

A Short History of Komaba High School Attached to Tokyo University of Education

The foundation of our Komaba High School was already consolidated in 1946, as the attached high-school of Tokyo Agriculture Education College. Later, in 1952, the school was merged in Tokyo University of Education also as its attached high school, continuing to exist up present. By what we call attached high school in Japan, is meant a school charged with a mission of testing the effect of education and forming educators, as well. Our Komaba High School is not an exception, either. However, Komaba High School students have no particular privilege with regard to the entrance to this Education University. Most of them usually, as boys in other excellent high schools, aim to enter the liberal course of Tokyo University or other first-class universities, the Education University among the member. These boys have been doomed to hard test ordeal as the victims of Japan's educational system to-day, which is universally known, next to the traffic hell in Japan. Now we are studying in the new building completed in 1964 with 259 junior grade high school boys under 2 classes for each grade and 505 senior high boys under 4 classes for each grade. The number of teaching staff is nearly 40 besides a dozen of part-time teachers.

Reason for Adoption of the Present Theme

At the head of its preamble the Constitution of UNESCO declares that it is in the minds of men that the defences of peace must be constructed, and also states that the wide diffusion of culture, and the education of humanity for justice and liberty and peace are indispensable for the dignity of man and constitute a sacred duty which all the nations must fulfil in a spirit of mutual assistance and concern; and further tells that a peace based exclusively upon the political and economic arrangements of governments, and a peace which could secure unanimous, lasting and sincere support of the peoples of the world, and that the peace must be founded upon the intellectual and moral solidarity of mankind.

At our school this subject was chosen with the view of finding a fruitful way to a better education of international understanding by making the pupils think about the peace, which represents the supreme quality of UNESCO spirit, and making them consider various problems on the actualities on the present-day world.

Hypothesis for the Experiment

In the current school year we are continuing the experiments of last year and are going to carry on our main experiments. The subject we set up last year was 'On Ideas of Peace in the East and West—as an approach to a mutual understanding of the cultural value of the East and the West', and various kinds of preliminary tests and experiments were made along the line. This year we hope to make use of the achievements and, reflecting on what we experienced last year, make close inquiries about the points of the subject.

One of the most remarkable points gained from our experiments last year, is this : from the angle of picking up and following up the matter of peace, we could not but take the direction to separate the realistic attitude from ideal attitude. (For instance, do we have only to see Sino-Russian dispute, from the view of the difference between East and West?) We, therefore, have purposely changed our subject into the 'Study of Peace' and have settled our hypothesis as follows :

We should be able to find a more effective way of education for international understanding by fixing two groups — one group to think about the international peace based upon the UNESCO Spirit and the other to study about peace in a realistic attitude — and then we try to compare their changes through our experiments.

Aims of the Experiment

1. To disclose problems by making comparative experiments according to a more substantial program than last year, formulated on the basis of the hypothesis.
2. To establish a distinction between the actualities and the ideals of world peace, especially as for the recent world situation and the scientific progress, backed up by specialists in these fields.
3. To closely evaluate the preliminary examination and the results of the whole experiment ; especially to observe its aftereffects produced on the students.
4. To make this experiment contribute to the improvement of the present high-school curriculum.

Subjects and Period

- a. Subjects :
 - 4 first-year classes of the Senior High School
(Each composed of 44 students ; all boys)
- b. Period :
 - Jan. 18 through Feb. 15.

Program

Date	Group Hour	Lectures	
		Experimental Group	Controlled Group
Jan. 18 (Mon.)	1	Preliminary Examination	
" 19 (Tues.)	1	History of Peace Campaign (by Akashi)	
" 21 (Thurs.)	1	On the Constitution of UNESCO (by Ōnishi)	
" 25 (Mon.)	2	United Nations and World Peace (by Daisuke Yamauchi)	
" 26 (Tues.)	1.5	Science in the Atomic Age (by Kōsuke Nakamura)	
" 28 (Thurs.)	1.5	Views of Peace among the Younger Generation in Europe and America (by Shiroki)	
" 18 (Mon.)	1.5	Activities of UNESCO (by Harukichi Hikosaka)	
" 26 (Tues.)	1	Kant's Comments on Peace (by Sawanobori)	Lenin's Comments on Peace (by Hayashi)
" 27 (Wed.)	1	Buddhism and Peace (by Hikaru Yamamoto)	Political Structure and Peace (by Okamoto)
		Suspended Christianity and Peace (by Suzuki)	
" 28 (Thurs.)	1		Problems of Armament Reduction (by Watanabe)
	1		Problem of North and South (Presentation by Students)
" 29 (Fri.)	1	Russell's Comments on Peace (by Ōnishi)	Recent World Situation and Peace (by Yoshikazu Sakamoto)
Feb. 15 (Mon.)	1	Postliminary Examination	

LECTURE I

ON ACTIVITIES OF UNESCO

By Harukichi Hikosaka

Chief of the Education Section of Japan
National Commission for UNESCO

UNESCO—which is short for the United Nations Educational Scientific and Cultural Organization—is one of the specialized organs of the United Nations.

Talking of what we call “International Understanding” or “Peace”, have you ever stopped to think what world-wide movements and organizations for peace exist after the war? We have been making a series of educational experiments for UNESCO for twelve years now. We have made an investigation before as to what ideas of peace the younger generation in Japan have. The findings then are classified into four large groups :

- (1) Only three percent of the subjects answered that they know the idea of the World Federation.
- (2) Only three percent answered that they knew what MRA is.
- (3) 48% answered that they knew the United Nations.
- (4) 30% answered that they knew UNESCO.

We think these are the four important activities which have been pursued concerning problems of peace through world-wide system or movement. The World Federation came into existence based upon the idea that the world is one and the same and the troubles would be dissolved if all the countries should go hand in hand with each other under the same government. World Federation was born in Switzerland after World War II. Dr Hideki Yukawa is now president. It has the acting as World Constitution with three subdivisions under it such as legislation, judicature and administration for the purpose of maintaining peace. MRA was the movement by the Oxford students after World War I, “dotoku-sai-buso” in Japanese, that is, a spiritual, revolutionary movement with the idea that we should rearm our mind not with weapons but with virtues. I think UN and UNESCO are clearly different from the World Federation and MRA. The latter (two) include not quite many countries, while the former are being promoted by volunteers and are in which organizations almost all the countries of the world take part in the quality of a nation.

Referring to UNESCO, it was born in 1946, that is, 19 years ago and it is the largest organ in the world which includes 117 countries. They are more than 114 countries of UN. At the latest 13th General Meeting the budget for 1965~66 was

made at 48 million dollars. It is about 17300 million yen, 450 million yen of which is for Japan, Then what is the difference between UN and UNESCO? UN is a system based upon the idea that we should cooperate to maintain peace with the principle of collective security. It sometimes appeals to the military force but of course conference precedes that to settle the troubles. UNESCO doesn't deal with such political, military and economic problems, but tries to lay the foundation of peace by promoting the international understanding and cooperation means of education, science and culture, and then by contributing to the common welfare of the world. The difference is, in a word, like the one between therapeutics and prophylactic in the medical field.

UN responds to the former and UNESCO to the latter. In addition to the contribution from all the countries, about 50 million dollars is contributed to UNESCO from UN, which is divided among the members. What is it used for? The greater part, that is, a little more than 30 % is for education and a little less than 30 % is for natural science and then the rest is for cultural activities. UNESCO has a backbone and three main principles in its activities. One is "understanding the other countries, that is, mutual understanding", the second "respecting the human right", the third "studying the international organizations".

The greatest emphasis of education which is the biggest item, is laid on the following three activities; promoting the compulsory education, of the world, basic education, that is a crusade against illiteracy, and education for international understanding. Concerning the problem of the compulsory education UNESCO is carrying on the plan to promote the compulsory education of the four areas of Africa, Latin America, Arabia and Asia. As for Asia, the compulsory education system of at least years is planned to be established in the 20 Asian members during the 20 years from 1961 to 1980. A fabulous amount of money of 20300000 million Yen, hundreds of thousands of teachers and a great number of schools are necessary. It is quite a big work. Concerning the problem of the basic education, 700 illiterate persons are said to be among the grown-up people (above age 15). It occupies the two-fifths of the grown-up people and they are the greatest obstacle to make the international understanding impossible.

At present UNESCO is endeavoring to stamp out illiteracy from the world.

It is one of the chief activities of UNESCO to spread fundamental education among uncivilized peoples, and Japan has been co-operating in this activity for several years.

Thirdly, as regards the education towards international understanding, Japanese schools took part in the activity years ago, and now, at nearly 300 schools of about 50 countries, they are studying earnestly about this problem. Our school—Komaba Upper Secondary School attached to Tokyo University of Education—is one of them.

Now, what are the basic ideas of UNESCO? The Preface to the Constitution

of the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization says: Since wars begin in the minds of men, it is in the minds of men that the defences of peace must be constructed. I have once heard Mr. Yokota, Chief Justice of the Supreme Court complain that there have been no political and economic arrangements that have not been violated. It means that any treaty or agreement ought to be based upon mutual trust and friendship, which idea is just as same as the Constitution of UNESCO declares. It reads: A peace based exclusively upon political and economic arrangements of governments would not be a peace which could secure the unanimous, lasting sincere support of the peoples of the world, and the peace must therefore be founded, if it is not to fail, upon the intellectual and moral solidarity of mankind. In short, UNESCO aims at growing the intellectual and moral solidarity among all nations, upon which all the political and economic arrangements are based. The Constitution adds: Ignorance of each other's ways and lives has been a common cause of that suspicion and mistrust between the peoples of the world through which their differences have all too often broken into war. In fact the World War II was caused 'by the propagation through ignorance and prejudice, of the doctrine of the inequality of men and races'. Thus UNESCO tries to make all the nations understand fully its fundamental ideas that mutual understanding and the respect of human rights are the most effective way to banish wars.

I do wish all of you to get more knowledge about UNESCO and its ideal by studying about everything concerning UN and its special agencies, and to make every possible effort to try to realize world peace.

LECTURE II

BUDDHISM and PEACE

By Hikaru Yamamoto

Professor Of Tokyo University Of Education

I don't intend in my today's lecture such a fanatic thing as, "If all the people in the world become Buddhists, peace will spread on earth at once". Nor do I wish to tell you that people will be cured of their disease or that they will become wealthy, once they come to have a faith. These things I regard as quite irrational and absurd, and I think nothing is further from the truth than these ideas.

If we wish to have our illness cured, we should get the help of natural science, especially medical science. Again, if we wish to do away with poverty, we ought to study social science, know the complicated mechanism of society, and try to remedy the evil by virtue of politics. I do believe this, but at the same time I am well aware that the social world without disease and poverty is not everything to man.

In Sweden, where people are reported to be enjoying highly advanced welfare facilities, the number of the suicidal cases of the aged ranks highest in the world, so I hear. This fact makes me think that there is a certain sphere of activities exclusively for religion. The dimension of religion differs from that of natural or social science, or of politics, and neither contradictions nor conflicts seem to exist between the dimensions of these.

Speaking of dimensions, what are to be done in the dimension of natural science you are studying? In this field we make observations or experiments of the external world, the world opposite ourselves, and then we deduce principles from the obtained results. Then, what about ideological matters? In this sphere, we deal with abstract ideas. In the dimension of religion, however, the case is utterly different. Religion is the matter of personal experiences,—real living experiences of each individual.

You all know the Buddha's well-known words, "Holy am I alone throughout heaven and earth". These words do not mean, "I alone am great in this world and all others are not". The true meaning is, "Myself and the universe are one and the same". Another thing, Saint Shinran, founder of a Buddhistic sect Jodo-shin-shu, in his famous book of sermons "Tan-ni-sho" wrote, "As to the Buddha's long-contemplated vow, I thought lit over and over again, and finally I came to the conviction that it has a sole purpose to bring me salvation". According to Shinran Buddha's desire to save mankind was after all to save Shinran himself.

There was in China a celebrated holy priest belonging to the Zen Sect, called Pai Chang, in the Tang Dynasty (618—906). This priest, when asked what he thought was most admirable in the world, answered, "My existence in this glorious mountain". He meant to say that he certainly was in the fairy mountain, and this fact was the most admirable thing in the world. I mention all these just to signify that in religion every individual person is of importance, and personal living experiences matter greatly.

Let me explain the meaning of personal experiences by citing an episode about Buddah. Buddah was once preaching a sermon at Mt. Reishu. During his discourse, he gave a hearty spontaneous smile, fingering a flower called 'Konbarage'. Though there were many excellent disciples, such as Anan, the most assiduous learner, Sharihotsu, the wisest, among the multitudes present there, yet none but Kayo could successfully interpret their master's enigmatic smile. Because he highly respected experiences and deeds, this disciple alone knew the true reason why Buddah smiled.

You've often heard 'Munen-muso' or smadih, haven't you?

I referred just a few minutes ago to the importance of real living experiences. By saying 'real living experiences' I've wanted to speak about this kind of spiritual experiences. 'Munen-muso' is quite different from rapture in that the one means something of mental calmness and aptness to handle some accident without losing one's composure. Anan only had the presence of mind or was in the state of 'Munen-muso' as you see. Buddah, looking at the embarrassment of his audience, said, "The truest meaning of my smile can be thoroughly conveyed by neither letters nor words, but it must be acquired by oneself through one's own efforts".

According to Mr. Shofu Muramatsu, Jirocho of Shimizu experienced dozens of duels with swords all through his life. He hadn't learned the proper and formal ways of handling a sword, and yet almost always he remained victorious. The secret of his constant victory was that with the tip of his sword he gave as light a push to that of his opponent's sword, and killed the other the moment the other tried to push his sword back with force; but he sometimes noticed that his sword met with as ever little resistance as if he were beating the air with it; and when he knew at once his opponent was a master swordsman and that he was no match for him, Jirocho found himself taking to heels for dear life. This is why he had hardly ever been defeated fatally at duels. How on earth is it that Jirocho, knowing just a little bit of Kenjutsu as he did, could behave so tactfully at those critical moments and avoid dangers? Because his mind knew no rigidity or had no preoccupation; he was never prepossessed with anything. That sort of mental condition was called Muju (literally unoccupied) by the Rev. Takuwan.

I'm going to introduce here an interesting short story to illustrate that conception. In 'Exquisite Skill of an Old Cat', a book published during the Tokugawa Yoshimune's Reign (from 1716 to 1751), we can read the following: there was a Kenjutsuka (a

master of the art of Japanese fencing) quite perturbed by the mice in his house. He let off many good mousers to get rid of them. But against his expectation none but one old cat could eradicate the mice. After he had finished with his duty, the veteran mouser talked to other perplexed cats about the secret of his successful work, saying, "I've done my work naturally and artlessly; I was quite free from mental strain unlike you. "His words were brought home to everyone. When the old cat finished speaking, one of his audience asked, "What meanest thou by 'no opposers, no ego'? 'No ego, no opposers', replied the venerable cat.

"Opposer" signifieth etymologically 'being placed against'. As shall be seen in the relations of sun and moon, water and fire, so nothing existeth in the universe but hath its antipodes. Whence cometh the conclusion that if there should appear no imageeries in thy mind, hence nothing standeth opposed against them; as the shadow cannot be unless there be the sun. The instant when thou hast succeeded serenely in letting thyself stand out of mind and releasing thyself from all the imageeries therein, thou art absolutely at peace and hast become One. "If thy mind be serene and undisturbed", says the book further near at its end, " then thou art master lord of the universe".

I'm afraid you couldn't establish peace quite easily and thoroughly as long as you yourselves feel in a sense or another hostile to everyone around you. The quintessence of the Zen lies in experiencing that sort of mentality for yourselves. I hope I've been of some help to you for thinking about the problem of the peace from such a religious point of view as well. Everyman has an experience in transcending the confrontation between himself and others. As we are deep in meditation, we shall get to the frame of mind void of all thoughts and ideas. Yet, even such a stage seems to have something to be still desired. It doesn't satisfy us unless a new inspiration is flushed into our heart at this very moment. This is what we call enlightenment universally known both to Zen and all other religions. When a baby, we cannot discriminate between ourselves and others, but as we grow older, we come to know that it is only our body that we can recognize it to be our own. However, Christ says, except ye be converted and become as little children, ye shall not enter into the kingdom of Heaven, If we walk up to this principle, self abandonment, in applying our policy or utilizing science it would be the surest way to achieve world peace.

Conclusion of the Survey

The pupils of our school have long had a considerable interest in peace in their daily life. Through our main experiment, those with active interest in it have increased in number, which is the first result of our experiment. Before the experiment they comprehended 'peace' as a whole, only through common sense, and also they

had such tendency as to interpret it dogmatically. After the experiment a little skeptical reaction has been noticeable in them, which seems to show that they have come to avoid an easy-going conclusion as the result of their study about peace.

What kind of state is peaceful? As for this question, two groups showed no particular changes before and after the experiment in their answers that peace is the state of life in which there is no armed conflict nor any uneasiness.

The experimental group has shown very little change in their tendency to grasp actual antagonistic relations without scrutinizing real state of affairs. (for instance, they consider that there can be general peace even if there are some local conflicts.) The controlled group, however, has shown a slight change in their comprehension of the unpeaceful state and have come to grasp it correlatively.

To examine their level of comprehension of the idea of peace, the following question was given: 'Whether such and such country is in peace?' Then most of the pupils, before the experiment, answered contradictorily that both capitalistic countries and socialistic ones are in peace while they considered the conflict of the two systems as an unpeaceful state. But after the experiment the experimental group has removed their contradiction by thinking that socialistic countries caused conflicts, and the controlled group has changed its attitude and says that they are at a loss or that capitalistic countries seem to have caused conflicts. And both groups have come, in the same degree, to regard these countries much less peaceful.

As for the means to establish peace, the controlled group used to think that peace could be attained by disarmament, strengthening UN and building the spirit of peace in each mind, etc.

People depend much on the spirit of peace for the establishment of the true peaceful world but such an attitude rather retreat them into the field of abstract sense by making them slight the actual effort for the realization of true peace. The controlled group, however, would never show a tendency to withdraw from this world feeling the heavy pressure from the present complex international situation, but rather pursue it enthusiastically by establishing the connection with the present society. They are, as it were, always intent on the idea of how to win the realistic peace.

We carried on the present experiment in order to find the effective way of education for our students so that they may understand about international affairs. With this object in view, we tried to call on them to think about the most important UNESCO spirit, peace as well as the social problems between each country. Fortunately, the targets for the current year's experiment seem to have been accomplished, helped by last year's experiment. First, we could consolidate our guidance program and thoroughly perform our comparative experiment. Second, we get useful suggestions from many eminent authorities, which made it easier for us to lead the students. Third, through preparatory and plenary tests, we could more exactly compare and examine the characteristics of these two groups, experiment

group and controlled group. The greatest effect of this experiment on their learning is that it has led students to have a deep concern about peace and has improved their understanding so much that they are now up to the higher level of theories on peace.

At the same time, the experiment group showed us these respective tendencies as follows; the experiment group was philosophically elevated but some of them grew cool and indifferent to reality, while the controlled group came bravely push the way toward peace, though feeling more or less inconfident in its achievement, due to the difficult situations of the world. If peace can be achieved only by the offensive spirit as mentioned above, the way for education and international understanding education may have been suggested by the latter group's example.

Thirdly, by this experiment, we have been trying to spread Unesco's ideals as an activity of the Associated School's Projects in Education for International Understanding, and not to make a precise experiment on a certain subject. Most students have been very co-operative in this experiment, but some seem to have come to doubt the effect or value of this experiment. Most of these students have strong interest in and their own opinions about world peace, and so they have found it improper to have chosen 'Peace' as the theme of this experiment, for 'Peace', they believe, ought to be realized politically and economically, and not by Unesco. Such opinions of theirs might have been formed through their disbelief in the government. If we had known that beforehand and could have made them understand what this experiment was carried out for, with much more help of home-room teachers, this experiment would have been more successful.

In Japan today, all of us use the word 'Peace' so often that there are few who have speculated on what 'Peace' really means. And what is worse, no special course for teaching of peace is arranged in the current course of study, and teachers are apt to evade discussing 'Peace' from the realistic point of view, together with students, on account of the difficulties in dealing with this theme.

But judging from the data gained by this experiment, it seems clear that our students' ways of thinking about 'peace' are rather common or superficial or contradictory. Some of the students are somewhat indifferent with the reality of the world, especially with 'peace', because 'peace' is too abstract a theme for them to think or understand. But since today is the very time when 'world peace' should be sought sincerely, we cannot evade this difficult task of seeking what peace really is. Therefore, it is strongly desired that 'Study on Peace' should be included in the Course of Study as an independent unit. Such amendment of the present Course of Study has to be done as soon as possible, because education for peace is indispensable if we wish our younger generations to grow to be a truly peace-loving people.